

C・F・バスターブルの財政思想

——その人と評価をめぐって——

戒 田 郁 夫

I

第2次大戦後、経済科学の分野で特に著しい変容を遂げたもののひとつに財政学があげられている。

既に、1930年代に経済理論が財政研究の領域へ侵入し、その研究方法に著しい影響を及ぼしたが、この傾向は戦後になっても変わらず、1959年に、マズグレイヴ (R. A. Musgrave, 1916-) の『財政理論』*The Theory of Public Finance : A Study in Public Economy*, New York. が出版されるに及んで、研究方法や研究対象に照応する財政理論の構成が全く一変したことは周知の通りである。政府活動の国民経済に与える効果および国民経済の変化による政府活動への影響に関する分析に重点を置く現代の正統派財政理論に対して、戦前の伝統的財政理論は、政府活動とそれに必要な財源調達方法に関する諸問題の歴史的・制度的分析を中心とするものであった。

「近代財政学はドイツの官房学を父として、イギリスの古典派経済学を母として生れた」といわれていたにもかかわらず、少くとも19世紀後半から20世紀初頭にかけて、財政学研究のメッカはひとりドイツが占め、イギリスはこの主題の研究に遅れをとったのである。ではなぜそのような状況が生成されたのであろうか。

プレスト (A. R. Prest, 1919-) の説明によれば、アダム・スミス、デイヴィ

ド・リカード、ジョン・スチュアート・ミルらイギリス古典派経済学者は、それぞれの著書の中で、財政論の主題を収入・支出・債務に分け、相対的に、スミスは支出論を優先し、リカード、ミルは他の2つの分析に専念した。これに対して、19世紀のマーシャル (Alfred Marshall, 1842—1924) やエッジワース (F. Y. Edgeworth, 1845—1926) の時代には、「財政学がひとつの主題として体系的に検討されたということは殆どみられない。マーシャルの『原理』は随所で租税論を展開しているとはいえ、租税問題を転嫁と負担の配分に限定したので、その立場は極めて明白である。このように当時の著名な経済学者の主著から財政学の主題全部の体系的な解説が消えてしまったのである。……この発展の必然的な結果として、財政だけをとり扱った本が現われた。大英帝国で最初のものが、1892年に出版されたバステープルの『財政学』である。」¹⁾。

またN・ジャー (Narmadeshwar Jha) も彼の呼称するマーシャル時代 (1890年—1915年) に経済理論から財政学が分離独立した事情を次のように説明している²⁾。

「経済思想史では、一般の慣行としてこれまで財政思想の発展に注意を払うことが殆どなかった。……シュンペーターの経済分析は例外であるが、それでも、取り扱い方はばらばらで、また不十分である。その理由は、新古典派の時期を通じて、財政に関する問題が経済理論の主要な体系からやや隔離されたからである。その結果、遂に財政学は経済学の主流から脱落したのである。経済学と政治学の境界を区切って財政学を独立の学問とみなすことが一般的に試みられるようになった。財政学説史は、かくて、財政を専門に著述する人々の仕事となったのである。」そしてその財政専門家の代表がバステープルであるので、ジャーによれば、バステープルの財政思想は新古典派の財政思想ということになる。

1) (18) p. 14. なお、注の括弧づきの数字は後掲の引用文献リストのなかの著作番号を示したものである。

2) (12) 2nd. ed., p. 167.

さて、このような状況の下で生れたバスターブル（Charles F. Bastable, 1855—1945）の『財政学』*Public Finance*, London & New York. (MacMillan and Co.) は、「英本国に於いてのみならず、米国に在りても江湖異常の歓迎を受け」³⁾、またわが国においても、1899（明治32）年に翻訳書が出版され、少くとも明治末年に日本の財政学界にワグナー流の財政学が定着するまで、彼の著書が我が国の学界に一定の貢献を果したことは確固たる事実である⁴⁾。

しかしながら、バスターブルは今や「忘れられた経済学者」の中に名を連ねている。例えば、シルズ(David L. Sills) 編『国際社会科学百科辞典』（全17巻）*International Encyclopedia of the Social Science*, 1968. の中で、独立の項目としては勿論、重要事項との関連においても、バスターブルの名は殆ど出てこない。もっとも、彼の名は忘れ去られても、かつて著書・雑誌・辞典等に執筆した彼の言説が部分的に現在でも時々引用されていることを、われわれは、『社会科学引用索引』*Social Science Citation Index* から知ることができる。

特に彼の財政学説、とりわけ公債論について、第2次大戦後の公債論争の引金をひき、学界に大きな波紋を投げかけたブキャナン(J. M. Buchanan, 1919—)が、バスターブルを公債学説の新政統派の先駆者として再評価したことは記憶に新しい⁵⁾。

またグローブズ(H. M. Groves, 1897—1969)も、バスターブルが租税論の中で、ワグナーの見解を批判して、課税の非国庫目的を否定している点に注目し

3) (47) 77ページ。

4) バスターブル財政学の我が国への導入と普及については、別稿を用意している。

5) 「古典派の定式は、H. C. Adams, C. F. Bastable および P. Leroy-Beaulieu の著書のなかに最もよく提示されている。彼らの著書は、文献上今日でも依然として公債の最も細心な分析である。合衆国の H. C. Adams の著書は、その分析の明快さにおいて Bastable のものに及ばない。他方、Bastable の著書は Leroy-Beaulieu のものよりやや劣っている。C. F. Bastable の労作は、われわれが新政統派に欠くべからざるものとして分類した3つの基本命題を、ひとつひとつ言及しているので、……本論の構成のため取り挙げるに値する。」とブキャナンは述べ、バスターブルの公債観の説明にかなりのスペースをさいている。[(6) pp. 106—107.]

ている⁶⁾。

かくして、バスターブルの名はやがて人々の記憶から消え去る運命にあるとはいえ、財政学説史上から完全にその名が消えてしまうわけではない。このような状況にあるバスターブルの財政学説史上における地位と役割を確定するためには、彼の財政思想の本格的な検討を必要とする。以下の拙論は、筆者の懸案のバスターブルの財政思想研究のための序説として執筆したものである。

II

第2次世界大戦も終焉に近づいていた1945年の正月、アイルランドの有力紙『ダブリン・イーヴニング・メイル』*Dublin Evening Mail*の1月3日号に掲載されたアイルランド生れのイギリスの文豪、バーナード・ショー (G. B. Shaw, 1856—1950) のゴシップ記事が人目をひいた。

「G B S急逝の流言

現在89才のバーナード・ショー氏は、昨夜ハートフォード州の自宅で、ショー逝去の風説を追って、同村の電話交換局がロンドンからひっきりなしに呼び出し電話をうけていたことも知らずに、安らかに眠っていた。ショー氏の家政婦は、新聞記者に今日次のように語った。且那樣はいつもと全く変りがございません。」

文芸界の巨匠ショー他界の噂が新聞をにぎわせた丁度その日に、アイルランドの経済学界の巨星が息を引きとったのである。しかし、ダブリンの有力紙でその人物の死亡記事を報道したものはひとつもなかった。例外として、2つの週刊紙が10日後に彼の死去のニュースを流しただけであった。

「物故者

バスターブル——1945年1月3日、ラスガー区ブライトン通り52の自宅

6) (10) p. 101. なお本書は、グローブズが1959年頃から執筆し始めた原稿を、弟子の Donal J. Curran が、グローブズの死後、編集発行したものである。

で死去。チャールズ・フランシス・バスターブル，英国学士院会員。クロイン 監督区ロック 教会堂の牧師，R・バスターブル師の子息。」（*Times Pictorial*, Saturday, January 13, 1945.）

「物故者近況

チャールズ・F・バスターブル氏，法学修士，法学博士，英国学士院特別会員（90才）。ラスガー区ブライトン通り52の自宅で死去した。最も著名な学者のひとり。同氏はシャレヴィルの生れで，ファーモイ・カレッジで教育をうけ，ダブリン大学トリニティ・カレッジを卒業してのち，1882年からトリニティ・カレッジの経済学教授に就任，1932年退職。1883年から1903年まで，ゴールウェイのクイーンズ・カレッジで法学および経済学の教授を勤める。また1902年にはダブリン大学トリニティ・カレッジで法学および国際法の講座の教授，1908年から1932年まで，法学欽定講座担当教授。」（*Irish Weekly Independent*. Saturday., January 13, 1945.）

1591年に，ダブリン市民がエリザベス女王の勅許状を入手し，トリニティ・カレッジを創設したと伝えられるアイルランド最古の歴史を誇るダブリン大学で，経済学部（1832年創設）の教授職を50年，法学部（1668年創設）の教授職を30年勤めあげ，碩学として有終の美を飾った人物の死亡記事にしては，上記の報道は余りに簡単すぎるものであった。このことは，バスターブル翁が当時のダブリン市民にとって，もはや忘却の人となっていたことを物語るものである。

だが，経済学界はバスターブルの逝去に深甚なる哀悼の意を表明した。英国学士院は、『英国学士院会報』*The proceedings of the British Academy* の第31巻で，彼の門弟であり，彼の後任者として1934年にトリニティ・カレッジの経済学部教授になったダンカン（George Alexander Duncan, 1902—）の追悼文を掲載した⁷⁾。また1890年11月20日，経済知識の普及と進歩のため設立された

7) なお，この追悼文は後に1冊のパンフレット（4ページ）として製本され，1シリング3ペンスで市販されたようである。〔8〕の表紙]

英国經濟協會 The British Economic Association⁸⁾ は、創設以来の会員であった彼の死を悼み機関誌『エコノミック・ジャーナル』*The Economic Journal* に J・G・スミス (John George Smith, 1881—1968)⁹⁾ の弔辞を告示した。

A. 経済学との邂逅

ダンカンとスミスは、共にバステープルの経歴を略述したのち、彼が経済学に関心をもつに至ったきっかけについて、興味深いエピソードをまじえ次のように記している。

バステープルは、1878年にトリニティ・カレッジの歴史と政治学課程の第1次学位試験 Moderatorship に合格し、首席で卒業したが、この課程のなかに経済学が含まれていた¹⁰⁾。そして、これがバステープルと経済学との接触の始まりであった。彼は、当時の多くの大学卒業生と同じく、卒業後、法学の研究に専念し、遂に1881年に弁護士の資格を得た。しかしながら、彼が学士号の取得をめざして勉学に励んでいたとき、彼の興味をいたく捕えたあの経済学の研究を本格的にやり始める機会が、1882年に訪れて来た。すなわち、1876年から1881年までトリニティ・カレッジのワトリー講座¹¹⁾の教授であったジェー

8) この学会の創設の由来については、(49) pp. 1—14. を参看せよ。

9) 彼は、バステープルと同じアイルランドのコーク州に生れ、トリニティ・カレッジを卒業、バーミンガム大学の商学部長および副学長を歴任した人で、R.D.C. Black と同様、アイルランド経済学史の権威でもあった。Cf. *Who was who*. Vol. VI (1861—1970), p. 1050.

10) この年の経済学の参考書は、A・スミスの『国富論』（マカロック版）、J・S・ミルの『原理』及び『フォートナイトリイ・レビュー』*Fortnightly Review* への寄稿論文、T・E・C・レズリーの『土地制度論』、W・T・ソートントンの『労働論』、J・E・ケアンズの『経済学の性格と論理的方法』、その他F・ハリソン、W・N・ハンコックらの著書・論文であった。ちなみにこの年の経済学教授はJ・J・ショーである。〔24p. 61.〕

11) トリニティ・カレッジの経済学講座は、1832年ダブリンの大監督、リチャード・ワトリー師 (Rev. Richard Whately, 1787—1863) によって創設された。

サリー州アルバリー・パークの地主のH・ドラモンド (Henry Drumond) が自分の地所に年100ポンドの地代を課し、それを基本財産として、1825年にオックスフォ

ード大学でドラモンド経済学講座を創設し、初代教授にN・W・シーニョア（Nassau William Senior, 1790-1864）が就任、規約により、1830年にシーニョアの終生の友であるワトリーが2代目の教授に選出されたが、〔*Historical Register of the University of Oxford*, 1888. pp. 67-8.〕1831年の秋、英国国教会のダブリン監督区の大監督に任命されたワトリーは、1832年にドラモンド講座の規約を準用し、トリニティ・カレッジに、いわゆるワトリー経済学講座を創設した。(1)教授の任用資格は、ダブリン、オックスフォードもしくはケンブリッジ大学を正規に卒業した文学修士 Master of Arts または民法 Civil Law の学士であること。(2)教授の選出はトリニティ・カレッジの学長および古参評議員^{バチエラー}によって行われること。(3)任期は2年間保証されるが、同1人が5年以上連続して教授職につけないこと。(なおこの条項は、ドラモンド講座では1867年12月に撤廃され、ワトリー講座では1887年に改定された。)(4)教授は経済学の講義を年間最低9回行わなければならない、また毎年、教授選任権者と監察員に1回分の講義録を提出する義務を有すること。(5)全講義を忘れた年の手当もしくは年俸はすべて没収され、講義録というタイトルの付いた印刷物で手数料を収受してはならないこと、等々8項目の条項にもとづいて講座は運用された。〔(23) p. 130.〕

教授の年俸は、ワトリーの生存中、彼のポケットから拋出されていたが、彼の死後1866年からはトリニティ・カレッジの基金から給付されることになった。

初代の教授は、M・ロングフィールド（Mountiford Longfield, 1802-1884）である。なお、11代目のバスターブル教授は、1882年から1932年まで50年のあいだ教授職に就いていたが、これは1887年の規約改定によるとはいえ、異例に属することであった。バスターブルの退職した1932年から34年までは空席であったが、1934年にG・A・ダンカンが彼の後を継いだ。〔(25) pp. 76-7.〕

ワトリーの経済学講座創設の目的は、アイルランドの経済諸問題について組織的な教育の実施を企図したものであるが、この講座を基に、19世紀アイルランド人による経済学の労作が数多く生れた。「だがこの計画は最初、強力な反対にあった。というのは、当時は経済学に対して相当な偏見があったからである。しかしながら、ワトリーは目的遂行に成功し、‘アイルランド経済学の父’と書かれるようになった。』彼自身は再び大学の壇上に立つ意志をもたなかったが、講座の教授候補の選任のための試験を手伝ったそうである。彼はまた、公衆の関心を経済問題に向けることに熱心であったので、ダブリン統計協会 The Dublin Statistical Society と王立ダブリン協会 The Royal Dublin Society に対する協力を惜しまなかったどころか、1862年に2つの協会が合同して、アイルランド統計・社会研究協会をつくったとき、ダブリン統計協会会長からそのまま研究協会の会長（1847-'63）に就任した。〔(5) p. 21 & p. 48.〕

ところで、ワトリー講座の設置された当時のアイルランドの経済的背景について、J・G・スミスは次のように説明している。19世紀の20年代と30年代のアイルランドは急速な社会の変化と激しい政治的不安定および農村の動揺という特徴をもった異例の経済的困難な状態にあった。極度に低い生活水準・低劣な農業技術・過剰人口・社会

ムズ・J・ショー (James Johnston Shaw, 1845—1910)¹²⁾が任期満了によって退職し、その教授職に空席ができたからである。彼はその椅子にすわるべく立候補したが、必ずしも本気で応募したわけではなかったそうである。彼はすでに弁護士の資格を得ていたので、教授選考の結果が不首尾に終わっても、法曹界で活躍する途が保証されていたためであろう。

彼にはもうひとり手強い対立候補がいた。バスターブルと同様、青年法曹家であり、後年、この国が大英帝国から独立する直前の、アイルランド最高裁判所長官になった人物である。しかしながら、この由緒ある椅子をわが物にする幸運にめぐまれたのはバスターブルの方であった。自分が合格したのは速筆のゆえであると、彼は親友にみずから語ったそうである。当時、トリニティ・カレッジの評議員であったイングラム (John Kells Ingram, 1823—1907)¹³⁾を委

的混乱にもとづく資本の逃避、このような状態を改善するため、アイルランドの教育ある人々の間で、経済問題が盛んに論議されていた。彼らは、移民の促進・土地保有制度の改革・公共事業の実施・イギリスをモデルにした救貧法の導入等、一時的な手段で重大な危機を乗り切ろうとした。これはマルサスとマカロックが1827年にイギリス議会の委員会で証言したのと同じ種類のものであった。ワトリーがアイルランドに来るまでに、議論的は政府の援助による移民の促進とイギリス型の救貧法の導入にしばられていた。

当時の内務大臣W・メルボルン (W. L. Melbourne, 1779—1848) によって、1833年に貧困の研究に関する委員会が設置され、その結果、1838年にアイルランド救貧法が可決された。その頃イギリス救貧法に関する委員会の委員であったシーニョアの勧めでワトリーは貧困の研究に関する委員会の委員長に任命され、そこで実行可能な移民計画を起草したにもかかわらず、政府はそれを受け入れず、救貧法の導入政策を選択した。これはワトリーにとって決して愉快的事件でなかったことはいうまでもない。その後40年代、特に1848年の大飢饉の経験後、土地改良問題が移民問題の重要性に暗い影を投げかける方向へ進んだことは周知の通りである。これが1832年頃のアイルランドの経済状態と問題であった。[44] pp. 20—2.]

- 12) ショーの経歴については、*The Dictionary of National Biography. The Concise Dictionary, Part II. 1901—1905.* (1961), p. 382. および *The Dictionary of National Biography, supplement. Jan., 1901—Dec., 1911. Vol. I.* (1927) p. 303. を参看せよ。なお後者の執筆者 Thomas Hamilton は、トリニティ・カレッジにおける1873年の経済学賞の受賞者である。[24] p. 312.]
- 13) イングラムはアイルランドの歴史学派の代表者のひとりである。「古典学派の演繹法と歴史学派の支持する帰納法のメリットに関する長い論争は、通常、イギリス経済学

員長とする選考委員会の委員達は、答案の質だけでなく量をも採点基準に加味したので、彼の方が選ばれたというわけである。もしも当時のバスターブルの筆跡が後年のように読みとりにくいものであったら、恐らく委員達は、合否の決定に物指と計量器を使ったに違いないと、選考方法に対する皮肉と自らの謙虚さを交えて彼は述懐している。

B. 学 究 生 活

遊びの気持で応募しながら、幸運の女神に助けられてワトリー講座の第11代の教授に選ばれ、それ以後経済学の研究に生涯を捧げることになったバスターブルの人生は、法学から経済学への研究生活の変更という点で、少なくとも彼以前のトリニティ・カレッジの経済学者達の辿った方向とは逆であった。

ワトリー講座に付帯する教授の義務は軽少であったけれども、それに付与された俸給もまた余りに少額であったので、かくしてバスターブルは、他のアルバイトで収入を補わなければならなかった。彼は1883年にゴールウェイのクイーンズ・カレッジの教授を兼任し、1903年まで法学と経済学の講義を行ったが、毎期1週1日、朝にゴールウェイへ汽車で行き、その日の晩に郵便車でダブリンへ戻るといった厳しい生活が続いたそうである。また1902年にはトリニティ・

とドイツ経済学との間の論争とみなされている。しかしながら、歴史学派は英語圏の経済学者の間に支持者をもっていたのである。そして、彼らのうち2人は卓越していた——それは T. E. Cliffe Leslie と John Kells Ingram で、共にアイルランド人でトリニティ・カレッジの卒業生である。Leslie は Henry Maine 卿から歴史学派的接近方法を学んだが、他方、Ingram は Auguste Comte の弟子であり、心からの実証主義者であった。〔29〕 pp. 70-1〕

また、1878年にイングラムがアイルランド統計・社会研究協会会長（1878-’80）に就任した時に行った「経済学の現状と諸提案」は経済学における歴史的方法の強力な主張であって、これはイギリスのみならず、大陸諸国でも注目をあび、H. von Scheel 博士によってドイツ語に翻訳されたほどである。〔5〕 p. 28.〕

なお、イングラムは1873年に創刊されたダブリン大学の論評誌『ハーマセナ』*Hermathena*の初代編集長（1873-’88）であった。Cf. *Hermathena*. No. 415, Summer 1973. 所収の E. J. Furlong 教授の序文。これには1962年までの歴代の編集者名が列記されている。

カレッジの法学および国際法の教授に就任、さらに1908年には、欽定法学講座の教授をも兼任し¹⁴⁾、その身分を1932年まで保持し続けた。法学部での彼の講義は、弁護士資格の取得志望者向きとして推薦されていたので、教室はつねに満員であった。スミスによると、バステープルの「受講生は経済学よりも法学の方がはるかに多かったと伝えられているのは恐らく本当であろう。」。

バステープルは、それ以外に、講師として、1905年にはノース・ウェールズのユニバーシティ・カレッジ、1909年から10年にかけてマンチェスター大学に出講していた。また試験委員として関係した大学は、ロンドン、ウェールズ、マンチェスター、ベルファスト、ケンブリッジ、リバプール、シェフィールド、バーミンガムの8校に及んだ¹⁵⁾。

このように、ダブリン大学での兼職や各大学への出講は、当然かれの肩に負担がのしかかった。バステープルは、学究生活を通じて極めて多忙な教師であったが、77才で停年退職するまで、経済学と法学の講義を几帳面に行った。彼は自己の時間の大部分を多くの大学で法学の講義に捧げたけれども、彼の本当の興味は経済学に向けられていた。その学問分野のなかでも、とりわけ彼の関心は財政学にあった。しかし、当時増設中であった経済学のカリキュラムの中で、自己の興味のある科目だけを選んで講義する状況ではなかったので、経済理論全般の講義にその才能を費さざるを得なかった。

彼の活動は大学内だけに限られず、アイルランド統計・社会研究協会 The

14) 1877年に創設された法学・国際法講座は、1888年に欽定法律講座と合体し、そして1902年に独立の講座として復活したが、1903年に再度、欽定法律講座と併合した。

〔25〕 pp. 83-4.〕

「すでに経済学講座の席を20年間保持したバステープルが、1902年に復活された法学・国際法講座の教授に任命された。また欽定講座担当教授は民法・法学総論の教授を兼任していた。30年間法学教授を勤めていた H. B. Leech が1908年に退職したので、更に再編成され、欽定講座担当教授と法学・国際法担当教授をバステープルが兼任し、他方、民法・法学総論講座は欽定講座から独立した。1932年にバステープルが退職したのを契機に、完全な再編成が行われるに至った。」〔33〕 p. 38.〕

15) *Who was who*. Vol. IV (1941-1950) p. 70.

Statistical & Social Inquiry Society of Ireland 名誉幹事や副会長の要職に就いたり¹⁶⁾、また英国経済協会、のちの王立経済学会 The Royal Eco-

- 16) 1862年に発足したアイルランド統計・社会研究協会の土台のひとつであるダブリン統計協会は、ワトリー経済学講座の4代目の教授 W・N・ハンコック (William Neilson Hancock, 1820-'88: 任期1846-'51) [(28) p. 61.] のトリニティ・カレッジの16番教室から生れた。1847年10月、小数のグループの人々がダブリンに統計協会を創る計画を討議するために参集し、その案を進めることに一致した結果、ハンコックと彼の先任教授 J・A・ローソン (James A. Lawson, 1817-'87: 任期1841-'46) [(28) p. 60.] が設立準備委員に推され、彼らの尽力により、同年の11月23日に王立アイルランド学士院 The Royal Irish Academy で、ダブリン統計協会が正式に呱呱の声をあげたのである。1834年3月に創設されたロンドン統計協会、後の王立統計協会に遅れること約13年ではあるけれども、世界ではこの種の協会として最古のものに属している。

この協会の設立目的は、アイルランドにおける統計と経済学の研究を促進することにあつた。この会の設立された1847年と云えば、大飢饉が極度に達し、アイルランドの歴史のなかでも、異例の社会的困難な時期であつた。当時の危機は公共の意識を目覚めさせ、どのような方法をとれば最もよく社会的災難を軽減することができるか、有識者に考えさせる絶好のチャンスであつた。したがって、協会の目的は、単なる学問の研究に留まらず、経済学原理をアイルランドの特殊なケースに適用するにはどうすればよいかを考察することに主眼が置かれた。そのためには、この国の経済状態の悲惨さの原因とその改善策を、統計という手法を用いて、調査、研究すると共に、その結果を人々に知らせることが必要であつた。1849年に J・バーリントン (John Barrington) によって設立された公開講座は、そのひとつの方法である。かくして、ワトリー講座は、アイルランドの経済問題について組織的な教育の実施を企図して設置されたものであるが、初期においてワトリー講座担当教授と緊密な関係にあつたダブリン統計協会もまたその運動の一翼を担うものであつた。

1847年創設当時の会員は81名で、弁護士・経済学者・数学者・化学者・地質学者など世間に影響力のある著名な知識人が多数含まれ、会長は R・ワトリー、副会長は M・ロングフィールドと A・ラーコム (Captain A. Larcom)、そして幹事がローソンとハンコック、会計が S・ブラッカー (Stewart Blacker) であつた。'ホーム・ルールの父' と呼ばれ、ワトリー講座の2代目の教授であつた I・パット (Issac But, 1813-'79: 任期1836-'41) [(28) p. 60.] も会員のひとりであつた。また1849年5月には、アイルランド問題に深い関心を寄せていた J・S・ミル、N・シーニョア、G・ポーター (G. R. Porter)、J・マッグレガー (John MacGregor) が名誉会員に推薦された。

その後、1862年にダブリン統計協会はアイルランド統計・社会研究協会に改組され

onomic Society の設立に参加し、評議会幹事を勤めるなど、彼の活躍は極めて多彩かつ精力的であった。かくして彼は、1921年には経済学に対する著しい貢献により英国学士院の特別会員⁷に選出される榮譽に浴したのである。

1922年に彼は、長年にわたるアイルランド人民の激しい反英運動の結果、自治をかちとり独立へ一歩ふみ出した「アイルランド自由国」の財政委員に就任、この国の財政金融問題に関して議会で報告を行ったり、また時には、経済専門家でない同僚に対して財政に関する時論を解説していたようである。しかし、それは彼の長い学究生活の間のほんの僅かな部分をしめたにすぎなかった。晩年、彼は白内障を患い、徐々に視力を失っていったが、文字が全く読めなくなるまで、経済学との接触を保持し続けたそうであるから、バスターブルの生涯の大部分が学究生活そのものであったといっても過言ではないであろう。

過重負担の講義や学内外の行政職に多くの時間を割きながら、次に触れるように、なおも労作を次々と公表していった彼の活動は超人的ともいふべきであろうが、その見返りが学士院会員と白内障とは……。いつの世にも、先駆者と名のつく人には栄光と受難がつきものであるが、バスターブルもまた、その例外ではなかった。

会員も増大し、1864-65年度の会期の初めには、協会は261名の普通会员と22名の準会員を擁する大きな組織に成長した。

他方、社会学科に関するパーリングトン講義として人気を得て来たこの講座も1873年に新計画にもとずき、試験を伴う授業と地区委員会^{ローカル コミッティー}によって受講修了証^{ブライズ}を授与される講義の2クラスに分けられ、講師の有資格者も、大学の経済学賞入選者と、資格試験に合格してパーリングトン講義委員会より経済学を教授する資格を証明された教師の2種類となった。〔(5) pp. 1-26.〕

1837年に創設されたトリニティ・カレッジの経済学賞の1879年度入賞者であったバスターブルは、「1881年にパーリングトン講義との関係で協会の試験委員に任命されたが、試験を伴う講義の制度が1895年に中止されるまで、そのままの身分で活躍し続けた。彼は1886年から1895年まで名誉幹事に就任し、その翌年から1915年まで副会長の1人であった。1882-1893年までの間、彼は協会の研究会で一連のペーパーを発表したが、その大部分は当時の貨幣問題を取りあげたものであった。その後、しかしながら、彼は協会紀要に寄稿するのを中止している。」。〔(5) pp. 80-81.〕

C. 著述活動

バスターブルの学究生活の主要な部分を占める著述活動については、彼の『著作目録』A tentative bibliography of Charles F. Bastable's works

A 表

論文・ノート

書 評

雑誌名注	掲載期間	編数	雑誌名	掲載期間	編数
JSSISI	1882—1893	9	EJ	1891—1922	63
Hermathena	1886—1898	3	Hermathena	1903	1
QJE	1889—1903	2			
TBAAS	1890—1891	2			
EJ	1891—1917	28			
JRSS	1894	2			
ST	1923	1			
計		47	計		64

注. 雑誌の略記号については、後掲『目録』のⅢの星印をみよ。

B 表

時期区分注		論文・ノート		書 評		計	
		編数	構成比	編数	構成比	編数	構成比
I	1882—1886	6	12.8%	0	0.0%	6	5.4%
II	1887—1896	15	31.9	27	42.2	42	37.8
III	1897—1909	24	51.1	25	39.1	49	44.2
IV	1910—1923	2	4.2	12	18.7	14	12.6
V	1924—1932	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計		47	100.0	64	100.0	111	100.0

注. 第1期はバスターブルの経済学者としての準備期であり、第2期は主著3編を公刊し、彼の経済学者としての地位を確定した、いわば彼の理論の形成期であり、第3期は、それを基礎においた彼の著述活動の最盛期である。第5期の最終年は勿論、彼の学界隠退の年である。

published.¹⁷⁾ (後掲)を一瞥すれば、容易に知りうるであろう。いま、定期刊行物に掲載された彼の論文・ノートおよび書評だけに限って、彼の寄稿した雑誌名、掲載年、寄稿数等を一覧表にしたものが、前掲のA表(雑誌名、掲載期間および寄稿文の種類別編数)とB表(著述活動の時期区分と各期における寄稿文の種類別編数)である。

A表から明らかなように、バスターブルの著述活動の拠点雑誌は、初期においては『アイルランド統計・社会協会雑誌』*Journal of Statistical and Social Inquiry Society of Ireland*であったが、1891年以降は、その年に創刊された『エコノミック・ジャーナル』*The Economic Journal*.に移った。後者に寄稿した論文・ノートは28編、書評は63編にも及んでいる。前者への寄稿論文は同協会の研究会であらかじめ報告したものを協会雑誌に載せたものであるが、それらは当時の貨幣問題を取り扱ったものが大部分であった。同誌の1893年8月

17) 筆者が昭和47年5月にイギリスへ行き、バスターブルの著作目録を作成すべく資料を調査中、すでに彼の著作目録がブラックによって完成されていることを知った。

ブラックは『ハーマセナ』の1945年11月号にトリニティ・カレッジの卒業生の経済学著作目録を掲載しているが、しかしながら、この経済学著作「目録に含めたものは、それぞれの主要な著書の初版や重要な続版だけである。論文やパンフレット類は特に重要なものを除いては、個々に取り挙げていない。ただ例外は故C・F・バスターブル教授の場合である。ここでは、出来るだけ完全なリストを作っておいた。ただし彼の著作目録はまだ公刊されていないからである。」と記している。〔28 p. 55.〕

しかしその後、調査を進めて行くうち、ブラックのものが必ずしも「完全なリスト」ではなく、かなりの欠落部分のあることが分り、気を取り戻して当該作業を進め、その結果をまとめたのが後掲の『目録』である。昨年、杉原四郎教授からJ・ライトもバスターブルの著作目録を作成しているというご教示を受け、それと照合したところ、HermathenaとJSSISIへのバスターブルの寄稿論文の掲載年月に若干の差異のあることを知ったが、筆者の『目録』に記載したそれら雑誌への論文の掲載年月は、筆者が直接それらにあたって記録したものであるので、再調査の機会を得て確認作業を終えるまで、筆者の記録したものをそのまま掲載しておくことにした。但し、ライトの『目録』によって、「JSSISI 8: June 1885」と「ST 12: June 1923」への寄稿論文を補えたのは幸いであった。

号に掲載された「複本位制のむずかしさ」The difficulties of bimetallism. という論文を最後に、バスターブルが協会誌に寄稿しなくなったのは、「丁度この頃、彼が経済学者として不朽の名声を築いた何冊かの書物を発表中であったからである。」とブラックは説明しているけれども¹⁸⁾、これがバスターブルに対する彼の好意的解釈であることは上記の表から十分推測しうる。

バスターブルの著作活動の時期は、彼が修士の学位を取得すると共に、処女論文が協会雑誌に掲載された1882年から、『研究』*Studies*¹⁹⁾に彼の最後の論文の掲載された1923年まで約40年間にわたっているが、本格的な活動期は、処女作『国際貿易論』*The Theory of International Trade*.²⁰⁾の公刊された1887年から1909年までの23年間であり、就中、バスターブルの代表的著書たる『諸国民の交易』*The Commerce of Nations*. と『財政学』の公刊された1892年をはさむ10年間（第2期）と次の第3期が彼の最も脂の乗り切った時期であった。

彼の研究テーマは貿易・金融・財政であったが、主著3冊のうち2冊まで貿易の理論と政策に関する書物である。彼は、『国際貿易論』の刊行によって経済学研究者としての名声を定礎したものの、彼自身それが非常に成功した著作だとは評価しなかったようである²¹⁾。これに対し「今日の社会諸問題」というシリーズものの1冊として、彼が執筆担当した『諸国民の交易』は、「極めて価値ある小著」²²⁾、「経済学教科書の有益な収獲」²³⁾などの賛辞でもって迎えられた。その著書のなかで彼は、貿易政策と原理を歴史的事実と関連させて要領よく説明し、当時欧米の後進国に流布しつつあった新保護主義、とりわけ幼稚産業保護論を自由貿易論の否定として捉えず、やがて自由貿易へ移行する

18) (5) p. 81.

19) カトリック教のイエズス会 the Jesuits の編集した雑誌で、1912年に創刊された。伝統的にアイルランドのナショナリストの見解を代表している。

20) 邦訳書として次のものがある。英国 シヂウィキック、バスターブル原著、日本 土子金四郎・田島錦治共訳『早稲田叢書 経済政策 附外国貿易論』（初版明治30年12月、再版明治31年6月、第3版明治33年12月）東京専門学校出版部。附載の「外国貿易論」がバスターブル該書の邦訳である。

ための準備段階に相応した理論ないし政策とみなした。このように彼は、保護主義の歴史的意義に理解をしめしながらも、その原理的誤りを剔抉し、自由貿易擁護論を展開したのである。ケンプがミル＝バスターブル・ドグマと呼称したように²⁴⁾、幼稚産業選定に関するミルのテストを拡充した貢献等にもとずき、彼の名は今日においても貿易学説史上に留められている。

しかしながら、彼の名声を不朽のものにしたのは同じ年に発表された『財政学』であった。スミスによれば、「バスターブルが現在もなお人々の記憶に留められているのは、『財政学』(1892)に関する労作によってである。マカロックの『課税の原理と実際上の影響及び基金制度に関する論文集』*Treatise on the Principles and Practical Influence of Taxation and the Funding System.*が1845年に公刊されて以降、この種の包括的な著書はイギリスに1冊もあらわれなかった。事実、アダム・スミス以来、イギリス的な見方や実践と関連した問題を主題そのものとした体系的著作は全くなかった。バスターブルの著書は3回改訂され、また何度も増刷された。しかしバスターブルは、1903年以後、彼に著書を改訂させようとするあらゆる努力に抵抗した。彼は厳しい自己反省の人であったので、当時彼に残された多くの約束を単に果ただけでなく、もっ

21) もっとも、彼がこの処女作に余りに染まなかつたのは、自らの筆力についてであったようである。というのは、学生達がその本を自分で読むよりも、バスターブルから直接本の内容の説明を聞く方を好んだからである。〔45〕 p. 129.〕他方、ブラックによれば、「バスターブルの国際貿易理論への貢献は、‘概して、ミルの細密化と洗練化という形’を取ったと要約されて来たが、しかしその洗練さの程度は相当なものであった。彼は、収獲の漸増および漸減を考察することにより、比較生産費説にどのような効果をもたらしたかを分析した。そして特に、もしも収獲漸減が生じた場合、他に交換を阻害することがないとして、それが2交易国で同じ商品の生産をもたらすことにより、国際特化にどのような影響を及ぼすであろうかという点を明示した。互恵的な需要の働きについて、彼は需要の弾力性という要素をこの問題に導入した。事実、彼はそうすることによって、古典派国際貿易理論をもっと最近の一般的価値分析の発展に結びつけようと努めたといつてよいであろう。』と。〔30〕 pp. 56-7.]

22) 〔35〕 p. 549.

23) 〔52〕の「書評欄」*Contemporary Literature* の p. 332.

24) 〔37〕 pp. 65-67. および〔26〕 42-48ページ参照。

と徹底的に著書を改訂しなければならないと考えていた。」²⁵⁾。

また、ダンカンも次のように記している²⁶⁾。「(財政学の)分野では、彼はイギリス人とアイルランド人の草分けであり、まだ十分ではなかった体系的な研究の基礎を築いた。後年、彼は『財政学』の全面的改作の必要を感じていたけれども、それを自分の手でやる気はなかった。それは若い研究者の仕事であり、自分よりも若い人ならもっと根本からそれを改訂することができるであろうと考えていた。」。

『財政学』の全面的改訂を委ねるに値する彼の意中の人が具体的に居たのかどうか知る由もないが、少なくともイギリスにおける財政学教科書の歴史の流れからみて、その人が「バスターブルよりも著名な後継者」²⁷⁾ドールトン (E. H. J. N. Dalton, 1887-1962) であったことは確かである。

D. 学風と人柄

バスターブルの学風については、彼の業績全体の検討を経て論結すべきであろうが、ここでは取りあえず、彼の講義を通じてその一端を窺ってみよう。

ダンカンによれば、「バスターブルの講義の特徴は、視野が広く、対立する学派をよく理解していることであった。拮抗する見解や論点の差異を学生達に示めして、同説となる見込の全くない主張のうち、いずれか一方を選択させるにあたって、学生自身の頭で考えるようにさせるのが、彼の好みでもあり、またそうすることが巧みであった。」。

25) (45) pp. 129-130.

26) (8) p. 3.

27) (18) p. 14. なおプレストは、バスターブルの著書が大英帝国で最初の財政学書であり、主題の全体的な取り扱いが、1922年に公刊されたドールトンの『財政学原理』によく似ている点を指摘している。またドールトンは、該書の末尾の「参考書」Note on Books のなかで、「Bastable 教授の Public Finance は近代英国で発行された財政に関する唯一の大きな体系的な著述であるが、理論及び実際の両方面に於ける最近の発展の結果として、多くの点に於て既に時勢おくれとなって了っている。」と記している。[(7) 3rd. ed., p. 208. (14) 242ページ。]

また、バスターブルの講義はその著作と同様、スミスの語るように、経済学に関する重要文献を博引旁証し、そのひとつひとつを綿密に論考しながら、先人の業績を評価し、そこから自己の主張をまとめ、自らをイギリス古典派、とりわけJ・S・ミルの後継者と考えていたようである。

彼の人柄については、ダンカンやスミスの文章が死者への追悼という性質のものである点を考慮に入れても、バスターブルは「多くの熱烈な友人と立派な弟子達の称賛の的であった」²⁸⁾というスミスの頌辞は、単なる儀礼的なものではない。身体が余り頑健ではなかったにもかかわらず、担当科目の講義に全力投球し、温厚で根っから親切的な、そして学生をつねに励まして、自分の意見を一方的に押しつけることを好まなかった彼を多くの学生は懐慕した。

このように、彼は誠実で献身的であるだけでなく、自己に厳しく、売名行為を嫌い、常にけじめを重んじる人であった。例えば、彼がトリニティ・カレッジの評議会で非評議員教授の代表をつとめていた1918年に、評議員資格に関する規約が改正されて、彼にもその名誉職に選ばれる資格が与えられ、カレッジの理事会が彼を評議員に推薦したいと申し出たにもかかわらず、彼がそれを固辞したのは、彼の一目かたくなな性格によるものではなく、むしろその人柄のゆえであった。事実、バスターブルは非常に愛嬌のある家庭的な人で、停年退職後、不治の眼病に襲われても快活さを失わず、訪れて来る人を歓迎し、彼らと楽しく語り合うのを好んだそうである²⁹⁾。スミスのバスターブルの人柄に対する評価も決して御世辞でないことがわかるであろう。

III

バスターブルの名を不朽のものにした1892年出版の『財政学』に対する書評については、次節でやや詳しくとりあげるが、彼の該書に対する共通の評価は、それがイギリス人の手によって初めて書かれた体系的な財政学テキストで

28) (45) p. 130.

29) (8) p. 3.

あり、マカロックの著作の公刊後、約50年のあいだ欠けていたイギリスの財政学文献のギャップを埋めた点で、イギリス財政学史に新紀元を画したということであった。

それでは、バスターブルの著作が出現する前夜のイギリスの財政学研究はどのような状況を呈していたのであろうか。

ヴィクトリア期のイギリスの雑誌で、1866年に創刊された『コンテンパラリー・レビュー』*The Contemporary Review* の1887年1月号の「論壇時評」*Contemporary Records* (II) 社会哲学の部に、当時の財政学の動向についての論評が掲載された。担当者のジョン・レー (John Rae, 1845—1915) は当時の貨幣問題の論点と潮流にふれたのち、ロッシャー (W. G. F. Roscher, 1817—'94) とフォン・シュタイン (Lorenz von Stein, 1815—'90) の財政学書を取りあげ、次のように論評している。「近時、他の経済書の中で、もっとも重要なものは、いまだ財政の分野の著作である。尊敬すべき経済学者、ロッシャーは『国民経済の体系』*System der Volkswirtschaft* のうち、財政論に当てられた新しい巻を出版した³⁰⁾。その中でもロッシャーの周知の特色——博識・簡潔・行き届いた解説——があらわれている。そして、それは国有財産・特権収入・租税・経費・債務に関するあらゆる問題についての経験資料と学説の極めて貴重な宝庫を成している。間もなくこれに引き継いで救貧に関する巻が出版される予定であるが、これで該書は完結する。ロレンツ・フォン・シュタイン教授はロッシャーよりも学識の点で劣るけれども、氏の重要かつ標準的な『財政学教科書』*Lehrbuch der Finanzwissenschaft*——丁度、新しい改訂版が公刊されたところである——の中で原理の検討をこれまで以上に十分に行っている。³¹⁾

この他、レオン・セイ (Jean Baptiste Léon Say, 1826—'96) の『租税問題の民主的解決』*Les Solutions Démocratiques de la Question des Impôts*, 1886.

30) ロッシャーが1854年から94年にかけて公刊した同じタイトルの著書 (全5巻) のうち、第4巻の「財政・金融編」を指しているのであろう。

31) ④ pp. 147-8.

とグスタフ・コーン (Gustav Cohn, 1840—1919) の『国民経済学研究』*Nationalökonomische Studien*, 1886. についても紹介しているが、ロッシャー、シュタイン、コーンと次々に財政学書の出版されているドイツとくらべ、「われわれは、イギリスの財政に関するこの種の体系的な著作を1冊たりとも持っていない。」というレーの無念のこもった言葉は、そのまま当時のイギリスにおける財政学研究の水準を端的に示めている。

アメリカにおいても事情は同じであった。レーの論評のあらわれた3年後、そしてバスタープルの『財政学』の公刊された2年前の1890年4月に、ハーバード大学の経済専門雑誌『クォーターリー・ジャーナル・オブ・エコノミクス』*The Quarterly Journal of Economics*. に「財政学に関する新著」というテーマの論文が発表された。筆者のアンドリュース (E. B. Andrews, 1844—1917) は、今や財政学入門書がかなり出版されているということを描いてから、財政学研究を志す者のためにガイダンスを行っている。そこで挙げられているものは、従来から周知のコッサ (Luigi Cossa, 1831—'96), アダムズ (H. C. Adams, 1851—1921), ルロワ・ボーリュエ (Leroy-Beaulieu, 1843—1916), ワグナー (Adolf Wagner, 1835—1917), シュタイン, ロッシャー, シェフレ (A. E. F. Schäffle, 1831—1903) ザックス (E. Sax, 1855—1929), ショーンベルク (G. F. von Schönberg, 1839—1908) らの著書であるが、更にコーンとマツォラ (Ugo Mazzola, 1863—'99) の1889年と1890年にそれぞれ出版された著書を新たに財政学の参考書として加えている³²⁾。このうち英語で書かれたものはアダムズの1887年に出版された『公債論』*Public Debts* とコッサの英訳本の『租税論』*Taxation, its principles and methods*, 1888. だけで、あとの著書はすべてドイツ、フランス、イタリ

32) Cohn, Gustav., *System der Nationalökonomie*. Ein Lesebuch für Studierende. Zweiter Band. Finanzwissenschaft. Stuttgart: Enke. 1889. S. 804.

Mazzola, Ugo., *I Dati Scientifici della Finanza Pubblica*. Rome, 1890. pp. 217. なおこの第9章の英訳は, Musgrave, R. A. & Alan T. Peacock. (ed.), *Classics in the Theory of Public Finance*. London & New York, 1958. pp. 37-47に収録されている。

の各国語で書かれたものである。

またアンドリュースは、初心者のために財政学入門の手引を行っているが、コッサの英訳本から入ってビショフ (Alois Bischof)³³⁾、マルツァーノ (F. Marzano)、ションベルク、コーンらの書物を読了してから、ロツシャー、ワグナー、シュタイン、そしてルロワ・ポーリュエの順で進むよう勧めている³⁴⁾。

勿論、財政学の分野において英語で書かれた典籍が皆無であったわけではない。例のマカロックの著作は、出版当時の価値が全く無くなるほど極めて陳腐となり、イリー (R. T. Ely, 1854—1943)、アダムズ、およびセリグマン (E. R. A. Seligman, 1861—1939) 教授らの著書³⁵⁾はその主題全体を包含するものではなく、そしてコッサの小著は、すでに財政学を研究している人にとっては、既得の知識の整理には役立つけれども、それ以上のものを求めようとしても殆んどみだされることはあり得ないし、またそれは、もともと英語圏の読者を対象として書かれたものではなかったのである³⁶⁾。

かくしてイギリスやアメリカにおいては、財政学の研究を志す者は欧洲大陸諸国の言語、とりわけドイツ語、フランス語、イタリー語の修得が必須であり、その点彼らは極めて不利な状態におかれていた。このような時期に出現したのがバスターブルの『財政学』であったわけだ。この書は大西洋を越えてア

33) Bischof. Alois., *Katechismus der Finanzwissenschaft*. Leipzig, 1870.

なお、この書の第4版(1885年)は、明治20年3月に飯山正秀が『財政学』という題名で、我が国で最初に翻訳した体系的な財政学書であり、アンドリュースもこの原著を財政学研究の入門書のひとつにあげているにもかかわらず、著者のビショフの経歴(生年および没年すら)は全く不明である。邦訳書の簡単な紹介は、大淵利男『明治初期西欧財政学を受容過程——わが国財政学前史に関する一資料——』(昭和53年)八千代出版株式会社。876—881ページに収録されている。

35) Ely. R. T., *Taxation in American States and Cities.*, New York, 1888.

Adams, H. C., *Public Debts, an Essay in the Science of Finance*, New York, 1887.

Seligman, E.R.A., *Shifting and Incidence of Taxation*, New York, 1892.

34) ⑦ pp. 325—331. および⑧ 278—9ページ参照。

36) ③4 p. 321. および③⑥ 278ページ。

アメリカ合衆国やカナダの読者にも歓迎されるのであるが、他方、バステープルの著書に遅れること4年の1896年に、アメリカ合衆国でも最初の体系的財政学書が生れた。プラーン(Carl C. Plehn, 1867-1945)の『財政学入門』*Introduction to Public Finance, New York.* がそれである³⁷⁾。バステープルの著書がルロワ・ポーリュエの『財政学』*Traité de la Science des Finances, 1877.* に比肩されたように、プラーンの著書もまたバステープルの縮小版として、大西洋を逆に渡ってイギリスに多数の読者を見出したそうである³⁸⁾。

とはいえ、プラーンのそれは、内容構成においてバステープルのものに似ているというだけであって、思想的にはG・コーンに近く、むしろプラーンの著書より2年遅れて公刊されたH・C・アダムズの560ページを超える『財政学』*The Science of Finance, New York, 1898.*の方がバステープルの類書を比肩すべき名著で、当時のアメリカの斯学における最大の収穫であった³⁹⁾。

IV

A. 新聞の書評

バステープルの『財政学』の書評を最初にとりあげたのは1892年7月1日(金曜)の『タイムズ』*Times*の「新刊紹介」Books of the weekであった。

「ダブリン大学の政治経済学教授であり、ロンドン大学の試験委員でもある法学博士、C・F・バステープルによる財政学(マクミラン社発行)については、教授自身の書いた文章以上に手ぎわよく解説できるものはない」という文で始まるこの匿名の書評は、イギリスにおける財政学研究の遅れの原因と、財政に関する体系的な教科書の必要性をバステープル自身に語らせたのち⁴⁰⁾、「バステープル教授の著述は終始明快であり、分別をわきまえ、そして中庸をえてい

37) (9) 403ページ。

38) (48) 107ページ。

39) (9) 408, 412ページ。

40) 下記のバステープルの「緒言」Preface(前5分の1)をそのまま引用している。

「財政学の主題は、経済学のそれと異なり、大英帝国で近年たいした注意をひくこ

る。彼の意見と結論には、確かに批判の余地のあるものがいくつかあるけれども、全体として、彼は非常に多くの実践的かつ論争的な問題点を提示する主題の包括的な扱い方を損なわずに、現在論争中の問題を賢明にも避けて通っている。」と論評した。

次に、彼の書物を紹介したのは、同年7月13日（水曜）の『ダブリン・イーブンング・メール』*The Dublin Evening Mail*であった⁴¹⁾。この書評は様々な示唆に富むところが少ないので、冗長ではあるが、ここにその大半を訳出してみよう。

「バスターブル教授の財政学に関する包括的な労作は政治学のその部門の極めて見事な解説である。事実、それはその主題全体にわたって取り扱った唯一のイギリスの専門書である。アダム・スミスの『国富論』とマカロックの『租税および基金制度に関する論文集』から始まり、『政治家年鑑』の最近号に至るまで各種の有益な著作が世にあらわれたが、しかしながら、バスターブル氏の本が出版されるまで、財政学を構成する収入と支出に関する多くの複雑な問題について、なんら真の学問の手引となるべきものが公刊されていなかった。バスターブル教授は、したがって、政治学のなかのこの重要な科目を多面的に

とがなかった。イギリスの財政諸制度と財政管理の卓越さこそ、このような結果をもたらした原因であって、そのため諸改革の実践の基礎として理論的な研究の必要性を差し迫ったものと受けとめなかったのである。わが国の財政文献は、若干の批評家が想像するほど、全く不作為ではないけれども、財政学の主題全体を取扱う労作に欠けていることは認めざるをえない。マカロックの周知の著書——初版の刊行は1845年、現在は絶版——の出版以来、学生の適切な参考書はひとつもなかったのである。授業の場合、特にこの種の欠落を強く感じるのである。財政の諸問題を教授しようと望む講師には、授業の基礎として使用すべき教科書——フランス、ドイツおよびイタリアの同僚の使用する教科書のようなもの——がなく、したがってまた、講師は受講生の簡単に入手できない、あるいは彼らにとって読みづらい外国の論文を常に参照せざるを得ないのである。本書において、私が試みたのは、学生が少くとも政治学の中の主要な事実の一般的な知識と現状を修得することができるように、財政学のあらゆる分野を検討し、そして体系的な形でその成果を提示して、この必要を一時的に充したことである。』〔(2) p.v. (1)「財政学原序」1—2ページ。〕

41) ダブリンの有力紙 *The Freeman's Journal* にも「新刊紹介欄」Books of the day があるが、ここにもバスターブルの『財政学』の書評をみつけることができなかった。

解説するにあたり、長年の切実な欲求を充したわけである。われわれは誰でも課税について、それが直接的なものであれ間接的なものであれ多少とも知っているし、あるいは知っていると思っている。われわれは、所得税が肉体的労働や精神的労働を問わず、労働そのものに対する租税である限り、その撤廃が困難であれば、せめて減税を行うようゴッシェン氏に⁴²⁾強く勧告する場合もあろう。また、われわれは、ゴッシェン氏が奢侈品、ワイン、ウイスキーおよび煙草に課税しようとするのを拒むのではなくて、このような改革の提案に納得のいく根拠を与える側に立たされると、われわれの先験的な考察が受け入れられないことは確実である。そしてわれわれの感じることは、われわれに苦痛を与える以外の理由しか示めすことができないか、さもなければわれわれがT・W・ラッセル氏の見解と同一のものを持つ外に方法がないであろう。政治家の目標は、バスターブル教授が力説するように、支出と収入のために課税の諸問題を取り扱うにあたって、社会に最大の利益を確保することではなければならない。どのような変化によっても非常に多くの関係者や階級はその影響をうけるのであり、それゆえにまた、異なった方針のなかでの選択の可能性と、いわば、国民の特異性を把握する必要がある。すなわち、博識の教授がいうように、この国の歴史と国民感情——“大部分は歴史的諸力の産物である”——から生じる“きわだった特徴”は財政学研究の体系化と世間周知の原理の形成という願望を論証することにすべて結びついているのである。バスターブル教授は、この学問の原理を学生、行政家および一般読者にひとしく興味をおこさせる方法で解説している。』。

「バスターブル教授の高書は、明らかに財政学文献に対するひとつの寄与であるが、それは彼が、実際に、ダブリン大学の創立300年祭に参加したフランス協会の著名な代表、ルロワ・ポーリユー、レオン・セイを含む現代の権威あ

42) George Joachim Goschen (1831-1907). 自由党の政治家で、グラッドストン第1次内閣(1868-'73)に入閣、救貧庁長官に就任し、地方自治体の改革に尽力した。[*The Dictionary of National Biography*. Vol. II (1912), pp. 134-140.]

る学者の見解をすべて検討し、財政文献を強化したからである。』。

『タイムズ』の論評は、要旨・特徴・評価という書評の形式を一応ふんでいるものの、殆んどバスターブル自身の緒言および序論から抜萃したもので、内容的には決してすぐれたものとはいえないけれども、バスターブルの『財政学』の発行月を確定する資料として役立っている。すなわち、バスターブルは『財政学』の初版の緒言執筆の日付を5月と記しているのに対して、『タイムズ』に書評の掲載されたのが7月1日であるから、彼の著書は恐らく6月下旬から7月中旬ぐらいにかけて、発行地のロンドン及びニューヨークを中心にイギリスとアメリカで発売されたものと推測しうる。

また『ダブリン・イーブニング・メール』の書評は、当時の財政学の分野での著名な学者の代表として、ルロワ・ポーリュウとレオン・セイの名をあげている。確かに、バスターブルもその緒言のなかで彼らの名前に言及している。しかしながら、緒言でバスターブルの直接明記した学者の名前は全部で13名のほり⁴³⁾、その中で特に恩誼をうけたのが、ポーリュウとワグナーの大著であったと彼は卒直に書いている。すなわち、

「わたくしは、この書物をまとめるにあたって、多くの人々から受けた大恩に謝意を表するものであるが、それに際し先ず誰れよりもルロワ・ポーリュウ氏にふれなければならないであろう。氏の『財政学』は恐らくこの主題に関する最も有名でかつ全体的に最も貴重な労作といってよいであろう。わたくしがこの学問を研究し始めるにあたって手引としたのも氏の著書であったし、わたくしは常にそれを利用することに喜びを感じると共に、そこから多くのことを教えられて来た。次に、わたくしが記しておかなければならないのはワグナーの力作であるが、氏は読者に均しく独創的な学説——それはしばしば論議の余地ある学説であるとしても——と細心に収集した多数の資料を供している。」⁴⁴⁾と。

43) ちなみに、初版のみに、「参考文献目録」が掲載され、そこでは財政理論・財政史・財政時事問題に関する参考書35点、その著者32名の名前を知り得る。

44) (2) p. vi. および(11)「財政学原序」4—5ページ。

同氏の書評がアイルランド人バスターブルの業績を高く称揚すると共に、ポーリューとセイという2人のフランス人学者の名のみを紹介したのは、遠く16世紀の半にさかのぼるクロムウェルのアイルランド征服以来の、アイルランド人の反英感情と彼らのフランスに対する近親感の隠微な発露ではなからうか⁴⁵⁾。

B. 総合雑誌の書評

ところで、バスターブルの『財政学』に関する本格的な書評は、同年9月に発行された『ウェストミンスター・レビュー』*The Westminster Review*⁴⁶⁾をもって嚆矢とする。1824年1月に創刊され、もともと哲学的急進派の機関誌であったこの雑誌は、論争関係にあった他の代表的雑誌と比べ、経済学に関する論評が多数掲載されていたとはいえ⁴⁷⁾、同誌にバスターブルの『財政学』の書評がとりあげられたことにはそれなりの意味があった。

「バスターブルの財政に関する見事な書物は長年の切実な欲求を充たすものである。マカロック氏の課税に関する論文集の出版以来、この主題に係わるイギリスの参考書で学生に裨益するものは全くなかった。バスターブル氏は財政のあらゆる分野を征旅し、読者が政治学のこの重要な部門の主要な事実と重要な状況を理解できるようにその成果を体系的な形で紹介している。」という同誌の書き出しは、先の2紙と殆んど変わらないが、内容の紹介にあたっては、この雑誌の政治的立場を鮮明に反映している。すなわち、

「公共支出に関する章は資料で満ちあふれている。そして国防費の論議は、実践政治学のあらゆる学生の興味をひき起させずにはおかないであろう。……彼は大戦争に伴う貿易の損失を憂え、軍備に伴う労働力と商品の大きな犠牲を

45) 36) 283ページ。

46) 53)

47) 経済学が古典的段階から近代的段階へと移行する過渡期(1820-'70)にあらわれたイギリスの代表的な季刊誌の性格や論調については、(21) 17-21ページ参照。

指摘する。バスターブル氏は課税問題を取り扱うにあたって、財政学のこの部分をあらゆる可能な見地から考察して来たことを立証している。彼の租税に関する下記の定義はわれわれをいたく感心させる。すなわち，“租税とは公権力の活動に対する個人もしくは個人の集団の富の強制的貢納である。”適切な専門用語の選択は経済学に欠けるところであり、それは故ジョン・スチアート・ミルの大著さえも十分に充たさなかったものである。」⁴⁸⁾。

この雑誌の有力な寄稿者であったJ・S・ミルの租税犠牲説を擁護し、戦争の労働者階級や富に及ぼす影響に否定的な見解を示唆するバスターブルの思想は、その限りにおいてまさに同誌の政治的立場に合致するものであった。

1865年にニューヨークで創刊され、政治・文学・科学・芸術などの分野の記事を総合的に取り扱った週刊誌『ネーション』*The Nation*の11月10日号にもバスターブルの書評が掲載された⁴⁹⁾。だが、そこでの評者である弁護士のミーンズ(D. M. Means, 1847—1931)の評価はバスターブルに対して必ずしも甘くなく、その論調はアメリカ人としての意識が横溢している。

英語で書かれた財政学の適当な参考書の欠如を、とりわけ教師たちが強く感じていたときに、バスターブルの著書がその穴を埋めてくれるものと思いつちであるが、本音をいえば、実際に財政学などなかったのも同然である。世間では、自由貿易論者のように、政府を必要悪として、政府の干渉を可能な限り排除しようとする人もおれば、他方、保護主義者のように、政府機能の拡大、したがって財政支出の増加を認める人もいる。彼らの間にこのような経済思想の対立がある限り、健全財政について合意を求めようとしても、それはとても無理な話である。かりに保護主義者を押えつけたとしても、反保護主義者の租税観も決して一様ではない。実際問題として、政府が収入を調達する場合、すべて課税理論にもとずいて行っているのではない。むしろ、各国の租税制度はそれぞれの国の歴史的経験をふまえて設定されているのである。臣民の間に叛逆

48) (53) p. 329.

49) (39)

を起させずに、彼らから収入をとり立てるのは並の統治者のすることであって、不満を大きくせず収入を増やすこと進歩の名に房わしい。事実、イギリスの財制税度はそのようにして成長してきたのである。

しかしながら、ミーンズはいう、「バステープル教授は、この主題に関して一定の島国的な思考から解放されているとは思えない。氏は明らかにイギリスの租税制度を理想に近いものとみなしている。しかし、われわれが氏の論旨を検討するならば、次のようなことがわかるであろう。すなわち、それは多数の個々に疑問の余地のある租税をいろいろ組合わせることによって、望ましい複税制度^{コンバウンド}が得られると主張しているのと同じであると。だが真実はこうである。大英帝国の租税負担は相対的に極めて軽く、そしていかに理論上悪税であっても、実際の面において酷なものでなければ、その税は恐らく廃止されずにおかれるであろう。」

そもそも租税制度の改革ほど困難なものはない。通常、人は何の知識もない新税に飛びついて行くよりも、むしろ欠点のあることを知っている既存の税に耐える方を選ぶのである。それ故、新税は理論上いかに長所があることがわかっていても、余程の理由がない限り、立法家や行政官が従来の制度を変えることは殆どない。

このように租税論および制度を中心にバステープルの見解の問題点を指摘したのち⁵⁰⁾、「われわれはあたかも財政を租税と同一のものであるかのように語ってきたが、しかしバステープル教授の述べるところによれば、租税は公共収入の主要な源泉であるけれども、それのみではない。」。財源として比較的重要度の低い公企業収入をとりあげ、一般に公企業はそれ程収益性の高いものでは

50) バステープルの財政理論の特徴のひとつが、経費論の指定にあつたにもかかわらず、書評家の論評が租税論に偏奇しているのは、当時のアメリカ人の財政学観を反映しているものといつてよいであろう。バステープルによると、「イギリスやアメリカにおいては、財政学の対象を租税論に限定する傾向が非常に強く、コッサの有益な『財政学』の英語訳アメリカ版のタイトルが『租税——その原理と方法——』と変えられた程である。」〔(4) p. 6. fn.〕

ないというバスターブルの見解を紹介している。

ミーンズの論評のなかで最も手厳しい詰問は、該書に索引がない点についてである。これを彼はバスターブルの重大な判断の誤りとさえ論難する。なぜなら、バスターブルの本の価値は参考書という性格に存するのであって、それ故、読者による資料の探索に便宜な索引をつけるのは当然のことであるにもかかわらず、それを付さなかったからというのがその理由である。

これと関連し、バスターブルの引用資料の適確性についても、ミーンズはナショナリズム横溢気味の文句をつけている。すなわち、バスターブルは合衆国の行政官学者、D・A・ウェルズ (David Anes Wells, 1828—'98) のニューヨークにおける課税報告を引用しているけれども、それよりも資料的に勝れている報告書があるにもかかわらず、それを採用していないと。バスターブルの『財政学』の中に見受けられるこのような不満や問題点を指摘したのち、「しかし一般的に、バスターブル教授はその主題、とくに文献だけでなく実際面にも極めて精通していることを示している。氏の著書は、すぐにイギリスの財政学の標準的な参考書の地位をしめるであろうが、その真価は、本書が今後長い期間にわたってその地位を保持する見込みが有望な点である。」という言葉でミーンズは書評を結んでいる。

C. 専門雑誌の書評

バスターブルの『財政学』初版に対する書評リストは後掲の『著作目録』のVに掲載しておいたが、まだ若干採録洩のあることはバスターブルの発言からも明らかである。彼は再版の緒言（1895年7月9日付）の中で次のように述べている。初版に対して「多くの評論家や投稿者から得たご批評とご教示を細心に検討させて頂き、その成果を十分に利用させて頂いたつもりである。公表された批評のなかで、私にとって特に恩恵を受けたと思われる方たちは、コーン、セリグマンおよびファーナムの各教授である。私的に頂戴したもので、どうしても言及しておかなければならないのは、フォックスウェル教授、E・キ

キャンン氏およびC・S・デバス氏の貴重なご意見である。』。

ここでは、バステープルに有益な助言を寄せたと彼自身語っている人達の中から次の3名、すなわちキャンン (Edwin Cannan, 1861—1941) , フェーナム (H. W. Farnam, 1853—1933) , セリグマンを選び、彼ら同時代の斯学の新進気鋭の研究者による書評を概観してみよう⁵¹⁾。

キャンンの論評は、バステープルの書物が出版された当初、それが余り注目されなかった事情から書き起している⁵²⁾。

「経済学の古書の買手として周知のロンドンの書店が総選挙の真最中にカタログの中の一冊を出版した。……今われわれの前にある労作は同じ不幸な時期に出版されたので、その結果、この書物は実際の値打とくらべてあまり注意をひかなかった。だが、このような不遇は恐らく永続しないであろう。」

ここでいわれている総選挙とは、1892年6月28日に、時の保守党内閣の首相(任期: 1886年8月—1892年7月) ソールスベリー (Marquess of Salisbury, 1830—1903) が議会を解散⁵³⁾、アイルランドに自治領形式の自治を与えるべしと主張するホーム・ルール派の首領、自由党のグラッドストーン (W. E. Gladston, 1809—'98) と、地方自治体方式の「権限委譲」に限定すべきであるとするユニオニスト(統一派)の若き指導者、保守党のチェンバレン (A. N. Chamberlain, 1869—1940) との間で、アイルランド自治法をめぐる争われ、その結果、第4次グラッドストーン内閣(1892年8月—1894年2月) が成立するのであるが、解散前には100議席の差で大勝すると予想されていたホーム・ルール陣営は42議席の

51) コーンの書評については、残念ながら今もって発見できない。フォックスウェル (Herbert Somerton Foxwell, 1849—1936) とデバス (Charles Stanton Devas, 1848—1906) については、バステープルに私的に意見を寄せたものであろうが、後者のデバスは当時、『ダブリン・レビュー』*The Dublin Review* の「社会科学解説」Notes on social science の担当者であったけれども、バステープルの『財政学』はとりあげられていない。

52) ⑧1).

53) ⑧5) Wednesday, June 29, 1892.

辛勝に終わったほど⁵⁴⁾、激烈な選挙戦がブリテン全土で繰り展げられ、国民の熱い目差を集めた選挙のことである⁵⁵⁾。

そのような不運にもかかわらず、「バスターブル氏はすでにイギリス人の中で、もっと正確に言えば、今日のイギリスとアイルランドの経済学者の間で極めて高い地位をしめている。そしてこの672ページからなる大著は、氏の名声に全く房わしいものである。」とバスターブルを称揚してのち、該書の構成と内容の要旨を説明すると共に、その特徴を記している。すなわち、バスターブルの主たる関心は収入論にあり、そこでの彼の感情は、累進所得課税に否定的である点からみても、明らかに保守的であるけれども、彼がアダム・スミスの有名な租税原則の説明を地方税の原理の附録で簡単にすましたことや、イギリスの租税論の重要課題のひとつである転嫁論について極く僅かのスペースしかあてていない点に、キャナンは奇異の感をあらわしている。

54) (13) 471ページおよび (65) Wednesday, July 20, 1892. では「その差40」と記されているが、(46)では差は42となっている。なお、下記に解散前と解散後の議会における政治勢力分野の変化を示しておく。

総選挙における政治勢力分野の変化

地 区 派	解 散 前			解 散 後		
	自治派	統一派	計	自治派	統一派	計
イングランド	145	320	465	197	267	465
ウェールズ	26	4	30	28	2	30
スコットランド	46	26	72	51	21	72
アイルランド	85	18	103	80	23	103
計	302	368	670	356	314	670

出所：(46) p. 293. の表より作成

55) 総選挙の終わったのが1892年7月18日であるので、[(65) Wednesday, July 20, 1892.] キャナンのように選挙の真最中に『財政学』が出版されたとすれば、その時期は7月上旬とするのが妥当なところであるが、『タイムズ』に書評の掲載された時期(7月1日)からの推測とくらべ若干のずれがみられる。

更にキャナンは、後に『イギリス地方税史』*History of local rate in England*, 1896. を執筆した人に房わしく、バスターブルの著書の弱点が地方財政の部分にあることを指摘している。また彼は、該書に誤植や誤字および誤解の多くみられることを丹念に具体的事例をあげて、その責任の分担を彼に求めている。このような欠点をいくつかもっているけれども、「しかしながら、氏の『財政学』はすぐに他の本と取りかえられるようなものではなく、緊急の欲求をみたすものである。今後、財政上の諸提案をいくつも行う人々は、すべてバスターブル氏の著作の知識を借りると共に、多かれ少なかれ、財政の全体的な計画にそれらの着想を適用するよう努めなければならないであろう。」とキャナンはバスターブルの著書の意義を高く評価している。

他方、1878年頃からベルリン、ゲッチンゲン、ストラスブルグで学んでG・コーンに共鳴し、帰米後エール大学に勤務してエールグループの主要なメンバーとなったファーナム⁵⁶⁾は、待望の英語で書かれた体系的な財政学書の出現に歓喜し、バスターブルの著書をルロワ・ポーリュウの名著に擬らえた。

彼は、バスターブルの著書の目的が新奇な理論や急進的な政策の実施を主張して、読者を驚かせることにあるのではなく、むしろ現代の財政問題を平易に解説することにあると論定している。とはいえ、バスターブルは財政理論を決して軽視したのではなく、租税転嫁に関する時論を取りあげたり、公債と租税の優位性を手際よく比較検討している点をとらえて、彼はバスターブルをそれなりに評価しているが、しかしこの点においては、ファーナムと先のキャナンの評価との間に懸隔がみられる。

該書の特徴のひとつは、ファーナムによると、公共支出論が総頁数の約1/6をしめていることである。しかしこれは通常の慣行から逸脱したものであり、公共支出論が財政学のひとつの分野であることを、バスターブルが論証しようとする程、ファーナムには、むしろ逆に政治学の分野に属するように思わ

56) (9) 348—9ページ。

れると。もうひとつの特徴は、いわゆる予算論に該当する「財政管理と統制」Financial Administration and Contrnl が末尾（第6編）におかれていることである。この編などは、公共支出論との関連で、初めの方におきかえる方が自然ではなかろうかと、彼は控え目に提案している。しかし「これらの所見は批判という方法で行われているのではなく、またこれらの特徴は、本書の価値を少しも損うものではない。」。

バスターブルの財政思想についていえば、それはイギリス古典学派の財政思想というよりも、むしろ現代イギリス学派のそれである。したがって彼の租税帰着論の扱い方は⁵⁷⁾、昔のイギリスの学者ほど厳密でなく、また彼は、国家の干渉に反対するけれども、自由放任の盲信者ではないと、ファーナムは論断する。

該書に誤植や誤字および引用の誤りのあることは、キャンナのすでに指摘したところであるが、ファーナムも又、この点について注意を喚起している。彼のあげている事実誤認の例は、合衆国のものに限られており、たとえば、国債の償還額と方法についてのバスターブルの誤解、ヨーロッパの数カ国における中央政府と地方政府の対照表の中で、合衆国の地方政府から郡と町が除外されている事実、そして州の支出の大部分は、ヨーロッパ諸国での中央政府支出の項目に相当するという指摘がそれである。

加えて彼は、『ネーション』のミーンズや後述する『エコノミック・ジャーナル』のL・プライス (Longford L. F. R. Price, 1862—1950) とは別の理由で、索引の必要性を婉曲に訴えている。「本書が索引をつけていないこともまた残念なことである。なぜなら、目次 the table of contents は完全であるけれ

57) 初版の第3編第5章の見出しは「租税帰着論」The Incidence of Taxation であった。第2版では「租税転嫁論」The Shifting and Incidence of Taxation と変わった。なお、「租税転嫁論」の敘述の簡明さについてセリグマンも書評のなかで称賛している。ブラックによれば、租税の分配と帰着に関するバスターブルの見解は、彼の独創的なものといってもよい位であると。〔30〕 p. 60.〕

ども、末尾にアルファベット順の索引がついていないので、これほど多数の経験資料を収集している書物でありながら、その有用性が半減しているからである。」。

最後に、ファーナムはバステープルの著書を次のように評価して閣筆している。「フランスおよびドイツの財政学文献に親しい読者にとって、バステープル教授はこの学問において大きな貢献を果したようには思われまいであろう。しかし、健全にして明快な論理、たくみな概説、読みやすい文体……を欲する人々は、バステープル教授の書物を歓迎し、彼の執筆の労に感謝するであろう。」。

ファーナムの冷静かつ卒直で、しかも学識に溢れた温い書評がバステープルの心を動かしたひとつの証左として、再版の緒言の末尾に記された彼の言葉を引用するだけで十分であろう。すなわち、「特別の目的で学生と読者の要請に応えるため、事項索引を加えておいた。」。

これ以外にも、シカゴ大学の機関誌『ジャーナル・オブ・ポリティカル・エコノミー』*The Journal of Political Economy* の創刊号を飾ったアドルフ・ミラー (Adolf C. Miller, 1866—1953) の書評論文や、バステープルと関係の深い『エコノミック・ジャーナル』に寄せたL・プライスの書評がある。前者は、例えば、バステープルが課税を公共権力の活動目的に狭ましく限定している点に異議を唱えたり、租税の分類におけるワグナー＝コーンの基準 (収入・財産・消費) を拒否し、バステープルの採用する直接税と間接税という旧来の分類方法に対する比判、あるいは租税負担の公平についても、バステープルが先人よりも極めて保守的な見解の保持者であると指弾するなど、いくつかの問題点を剔出しているけれども、彼の該書に対する評価も結局次の言葉に尽きている。すなわち、「要するに、教科書という点では、バステープルの著書はどこかの外国語で書かれたいづれの類書に比べても勝っていると確実にみなすことができるし、また経済学の著書という点では、10年間に出版されたイギリスの最良の書のひとつとして、それはマーシャルの『経済学』に次ぐ地位を占めるかもしれ

ないと、わたくしは考えている。本書が、これまでの良きイギリスの教科書に恵まれていなかったために、遅れていた財政の研究を促進するという当然の宿命に早く応えるよう期待せざるを得ない。」。

これに対し、後者の書評は極めて事務的であり、大部分バスターブルの著書の要約にすぎないので、書評というよりは単なる新刊紹介と称する方が似っかわしい。勿論、プライスも問題点は指摘しているが、それもせいぜい索引の欠如やバスターブル自身の遠慮深いあるいは不明確な見解の表明について苦情を述べるという、極めて常識的な範囲を超えていない。

「バスターブル教授の著書の摘要は、限られた紙幅の都合で、この書の値打と重要さをほんの僅かしか証明するのに彼立たなかったかもしれない。われわれがこの論評の冒頭でふれたように、本書はわが国の経済学文献の‘ギャップを埋め’そしてこの仕事を完成させた能力と成功の前には、この本に対する緊急の需要やこれの出現するまでの長かった時間的空白が霞んでしまう程である。」という最大の賛辞で結ぶプライスの書評をみれば、バスターブルといえども、再版の緒言の中でプライスの名をあげるわけには行かなかった彼の気持も理解できないことではない。

さて最後に、当時アメリカにおける新進気鋭の財政学者の代表であったセリグマンの書評でこの節の締めくくりにしよう。

セリグマンが勤務校のコロンビア大学の機関誌『ポリティカル・サイエンス・クォーターリー』*Political Science Quarterly*の12月号に寄稿したバスターブルの『財政学』に関する書評は、14ページに及ぶものであり、彼の財政学の学識からしても、これはいわばバスターブルに対する書評の総括と称してもよいであろう。

ところで、彼の書評は、1895年に出版された『租税論』*Essays in Taxation*の第12章「近代の歐洲に於ける租税に関する著作」の英国編に再録される際に、バスターブル評に関する肝心の部分の約 $\frac{1}{3}$ が削除・修正されている。それが単なる出版の技術的な制約によってそのようななされたのか、あるいは彼自

身の自発的な意思で削除したのか、軽々しく判断することは避けなければならない。というのは、削除された箇所の中にはバスターブルの財政思想の確定に直接係わりのある重要な部分が存在するからである。この点を念頭に置いて、セリグマンのバスターブル評を概観してみよう。

セリグマンは先ず、アダム・スミス以来のイギリスにおける財政学の研究動向を略述し、近代財政学がイギリスに生れながら、ドイツとフランスに比べて、体系的な研究の遅れた理由を、バスターブルと同じく、イギリスの財政制度の優秀さと一般経済界が良好な状態にあった点に求めている。しかるに近時、イギリスの財政状態が悪化の傾向を示し、そのため納税者たる市民の間に摩擦が生じ始め、これが政治問題となるに及んで、財政政策実施の決め手となる財政の基礎理論の検討の必要性が叫ばれるようになって来た。そして、このような時代の要請に応えて出版された「バスターブル教授の著書は、イギリスの財政問題におけるこの新しい関心の最初の学問的成果である。氏の本はイギリス経済学史に確たる新紀元を画するものである。というのは、近代的な装いをこらした財政学をイギリスの読者の前に置いた最初の包括的な企画であるから。多くの人々にそれは全く新しい一連の論議を紹介するであろう。そして特に、外国語に通じないイギリスの読者にとって、本書は(実に意外)であろう。(これこそ真の意味における先駆的労作である。)]⁵⁸⁾。

次いで、セリグマンは内容の検討に入り、極めて緻密な分析にもとずいて、適確な論評を行っている。

バスターブルの著書は、「全体として、勝れて独立の判断と、独自の新しい専門用語を示している。しかし、著者がドイツのモデルの影響を大いに受けたと思われる例が2、3ある」と述べ、租税の主体と容体についてドイツとイギリスとの間で理解の違いがあるにもかかわらず、ドイツの用語法をそのまま導

58) 以下、括弧内の語句は、最初の書評論文(1892年12月)にあったもので、後に削除ないし修正されたものである。なお、(20)では、前者は「歓迎される」、後者は削除され、代って「これが本書を十分に取り上げるためのわれわれの口実である」となっている。〔(43) p. 710, (20) p. 574, (16) 514ページ〕

入したことを彼は批判している⁵⁹⁾。

また、国有地収入や公企業収入および資本家としての国家に関するバスターブルの見解から、セリグマンは、バスターブルの思想的立場を「初期のイギリスの学者の自由放任主義と近代ドイツの半社会主義（の急進学説）の間の中道」⁶⁰⁾とみなしている。累進課税だけでなく、他の点に関しても、バスターブルの見解は、「極めて保守的であり、（彼のイギリスの先駆者よりもうんと保守的である。）」⁶¹⁾と。

セリグマンは、バスターブルの租税転嫁に関する議論は最もすぐれており、全体として他の財政学書と比較して遙かに優秀であると称賛しながら、他方、租税の普遍性に関する議論は、該書の敘述のなかで最低であると手厳しい批判

59) Political Economy と云う用語がイギリスで最初に書名として用いられたのが、ジェームス・ステュアート (James D. Steuart, 1712-'80) の『経済学原理』*An Inquiry into the Principles of political Economy*, 1767. であることは周知の通りであるがバスターブルもまた Public Finance という用語を書名にした英語圏の国で最初の人であった。

バスターブルが本のタイトルを Public Finance として、Science of Finance としなかったことに対して、セリグマンはかなりの不満を示している。というのは、finance という言葉が公私両方の経済を意味する場合に用いられることが多く、主として貨幣問題を示す用語であったからである。しかしながら、バスターブルはこのような事情を十分承知のうえで、Public Finance という言葉を公共経済の収入調達の意味に使ったことを、序論の最初の注で詳説している。ちなみに、アメリカで最初の包括的な財政学書を著し、バスターブルの著作と比肩される A・C・アダムズの書名は *The Science of Finance*, 1898. である。

セリグマンのような強い批判があったにせよ、Public Finance という用語が比較的早く市民権を得たことは周知の通りであるが、最近ではこの言葉を避けて、Public Economy とする傾向が強まり、Public Finance という用語がゆらぎつつある。

なお、当時新たに使われ出した学術用語の「経済史」という言葉が、イギリスで初めて書名に用いられたのは、Seabohm, F., *Village Community, An Essay in Economic History*, 1883. だそうである。〔56〕131ページ注6.〕

60) (43) p. 716, (20) pp. 577-8, (16) 521ページ。なお、(20)では radical doctrines の文字が削除されている。

61) (43) p. 716, (20) p. 578, (16) 522ページ。なお (20)では括弧内の文章が削除されている。

を加えている。

そして最後に、セリグマンは次の様な言葉で書評を結んでいる。すなわち、「私は、あえてバスターブル教授の書中にいくつかの小さな欠点のあることに注意をうながし、それがアメリカの学生（やアメリカの教室）を十分に満足させるものではないであろうという信念を指摘してきた。（しかし）われわれはそれがもともと（アメリカ人のためではなくて）イギリス人のために書かれたものであることを忘れてはならない。（そして）何人も本書を軽視するような考えでもって、上記の批判を受け入れないよう望まざるを得ない。（逆に、それは恐らくイギリスとアメリカの読者にとって現在出版されている財政学としては最高の本であるだけでなく、多くの点で将来の科学的な論議の基礎となるべき運命にある。）本書の構成は極めて整然としており、その説明は正確、気質は隠健、判断は機敏、そして知識は該博であるので、（それは財政学の本を書く者にとってだけでなく、経済学一般の教科書の執筆者にとってもモデルとして役立つであろう。公衆は、バスターブル教授と同様、名著の出現に欣喜しなければならない。）」⁶²⁾。

V

バスターブルが1895年に第2版を出したのは、初版が一時期絶版となったので、読者の再版を望む声が高まったからである。これを潮に、彼は初版に対する書評家たちの有益な助言や批判を参考にして、若干の改訂を行ったのである。例えば、初版では「租税原則」を第3編第6章の「地方租税原則」の付録で、しかもそれに充てたスペースは僅か5ページにすぎなかったのが、キャンナンの指摘を受け入れ、第2版では「租税原則」The canons of taxation という独立の章（第3編第8章）を設け、ページ数を倍にしたり、初版の第4編第

62) (43) p. 720, (20) p. 579, (16) 525ページ。なお、(20)では最後の括弧の部分が次のように変っている。「それは疑いもなくイギリスにおける財政問題の 科学研究を新たに促進するであろう。」。

8章の中に含まれていた相続税を独立の章にするなど、構成に若干の変更が加えられている。また、資料や数字を最新のものに訂正したり、あるいは初版にあった「参考文献目録」List of Works Referred to を削除した代りに、多くの論者から批判を受けた索引（事項索引）を付けるなど、それなりの努力が払われたが、しかしながら、彼自身が第2版緒言で述べているように、「学説や編別構成については実質的な改訂を行わなかった。」。そのことは、下記の「各版別編別構成の比較表」を一瞥すれば首肯できよう。

ところで、バスターブルの著書がイギリス経済学文献のギャップを埋めるほどの意義と役割をもつ名著であるという評価は、各書評家の共通したものであったが、しかしそれは、イギリスやアメリカなどのような英語圏での話であって、当時の財政学研究の先進国であったドイツやフランスでは、バスターブルの『財政学』は殆んど無視されたようである⁶³⁾。否、大陸諸国だけに限らず

各版別編別構成の比較表

版	初 版 (1892)		第 2 版 (1895)		第 3 版 (1903)	
	頁 数	構成比	頁 数	構成比	頁 数	構成比
総 分 量	viii+672	/	viii+716	/	xii+780	/
序 論	33頁(2部)	/	34頁(2章)	/	37頁(2章)	/
公 共 支 出 論 (第1編)	102頁 (8章)	16.2%	104頁 (8章)	15.7%	111頁 (8章)	15.3%
公 共 収 入 論 (第2-4編)	392頁 (19章)	62.3	421頁 (21章)	63.4	456頁 (21章)	63.0
公 債 論 (第5編)	101頁 (8章)	16.1	105頁 (8章)	15.8	112頁 (8章)	15.5
予 算 論 (第6編)	34頁 (3章)	5.4	34頁 (3章)	5.1	45頁 (4章)	6.2
緒言・序論・索引を除いた本文	629頁	100.0	664頁	100.0	724頁	100.0
索 引	/	/	8頁	/	8頁	/

63) 筆者がイギリス滞在中、可能な限りドイツ・フランス・イタリアの著名な雑誌にあたってみただけでも、調査した雑誌にバスターブルの書評を見つけることができなかつた。1892年に出版されたA・マーシャルの『経済学原理』の縮刷版『産業経済学要論』やL・コッサの『経済学研究入門』およびE・セリグマンの『法人課税』などの書評はあったけれども。

バスターブルの祖国アイルランドでさえも、その出版当時決して人々の注目を集めることができなかった。それはキャナンがいうように、丁度アイルランド自治法をめぐってブリテン全土が総選挙に熱狂していた時期にバスターブルの書物が出版されたという不遇さが働いたことも事実であろう。更に、彼にとって不運だったのは、その年の同じ頃にダブリン大学創立300年祭が重なったことである。7月5日から8日まで4日間にわたって挙行された創立記念祭と、例の総選挙でダブリン市は興奮の渦の中にあつた。1873年に創刊された、由緒あるダブリン大学の評論誌『ハーマセナ』*Hermathena* にすらトリニティ・カレッジの法律と経済学講座の教授の著書の紹介が掲載されなかったという異常さは、このようなバスターブルを襲った二重の不遇さと決して無関係ではないであろう。

それではここで、ダブリン市民には誇りと知的な刺戟を与えたけれども、新著の出版との関係上、バスターブルには不利益に作用したトリニティ・カレッジ創立300年記念祭の主要な行事と祝典の雰囲気、当時ダブリンで発行されていた新聞の記事を通じて、描写しておこう。

1592年にエリザベス女王からトリニティ・カレッジ創設の勅許状を授与されてから300年目の1892年に挙行された創立記念祝賀式に参加したのは、フランス・ドイツ・オーストリア・ベルギー・デンマーク・オランダ・ハンガリー・イタリー・ノルウェー・ロシア・スイス・カナダ・アメリカ・インド・スコットランド・ウェールズ・イングランドと、いわゆるブリテンを除いて15カ国から75の大学および研究機関の代表団で⁶⁴⁾、その参加人数は学術団体だけで254名に達したといわれている。そして、その中にルロワ・ボリュエ、レオン・セイ、エッジワース、ワグナーが名が見られた⁶⁵⁾。

ダブリン市内で発行されていた各新聞の紙面は、この祝典と総選挙関係の記事で殆んど尽されていた。『デイリー・イクスプレス』*The Daily Exrepps* な

64) (1) p. 7, (15) p. 250.

65) ② pp. 310-316.

どは、議会の解散された6月28日（火曜）号から300年祭の記事を掲載し、7月1日（金曜）号には、祝賀会参列者用の^{ドレス}礼服の仕立ての注文取りの広告を、7月4日（月曜）号には、記念メダルやブロンズ販売の広告を載せている。『アイリッシュ・タイムズ』*The Irish Times* の同じ日の号も、これに負けじと、記念土産用の香水の販売広告で紙面も飾り、いやがうえにも300年祭式典のもりあがりに拍車をかけた⁶⁶⁾。

式典の前日である4日の晩に、ラインスター・ホールで開会式のリハーサルを行ったが、心配されていた「総選挙の興奮も300年記念式典に対する市民の興味をそぐようなことはなかった。」⁶⁷⁾。

開会式当日に模様を『イーブニング・ヘラルド』*Evening Herald* は次のように書いている⁶⁸⁾。「ダブリン大学の創立300年祝賀式典が今日、あかるい日ざしの中で始まった。」。

盛り沢山の祝賀行事が準備されていた。初日の5日には、トリニティ・カレッジ内のイグザミネーション・ホールで来賓および各大学派遣の代表団の歓迎会が盛大に行われ、夜にはマンション・ハウスで華麗な舞踏会が繰り展げられた。「出席した紳士の多くは、文学修士の薄墨色と濃い青色から、法学博士の、あるいは文学士——だが彼らには柔い肩掛けがない——の光沢あるピンクシルクまで、様々な大学のガウンで装っている。……ドイツの大学から参加した代表団員の中には、すばらしく豊かな多色染めのシルクのスカーフを着け、とくに目立つ者がいた。」⁶⁹⁾。この舞踏会の招待者の中には、ポーリュウ、セイ、

66) 『ダブリン・イーブニング・メイル』*The Dublin Evening Mail*. (隔日発行) の7月4日号には、すでに大部分の代表団や来賓がダブリンに到着していることを報道しているが、パリだけでも7人を送り込んだフランス代表団〔88 p. 78.〕のひとり、ルロワ・ポーリュウが7月4日にダブリンに到着したことを『アイリッシュ・デイリー・インデペンデント』*The Irish Daily Independent* の7月5日号は記事にしている。

67) (65) Tuesday, July 5, 1892.

68) (67) Tuesday, July 5, 1892.

69) (60) Wednesday, July 6, 1892. なお、(65)の同日号にも、「ドイツの代表団は、セミ・ミリタリドレスを着用し、短剣をたずさえ、特に注目をあびた。」とある。

ワグナーと共にバステープルの名も記録されている⁷⁰⁾。

祝典の2日目の7月6日(水曜)には名誉学位授与式が行われ、工学修士3名・文学博士33名・理学博士23名・医学博士6名・法学博士5名がダブリン大学の名誉学位号を贈呈された。法学博士を授与された5名のうち、経済学者は、ボーリュウ、ワグナー、F・ウォーカー (Francis A. Walker, 1840—'97) の3名であった⁷¹⁾。式後、アイルランド総督主催の園遊会があり、夜には、ラインスター・ホールで17テーブル563名出席の大晩餐会が行われたが、記録によれば⁷²⁾、ワグナーとボーリュウは同じテーブルである。

これらの行事の中の圧巻は、最終日の8日にイグザミネーション・ホールで開催された世界的に著名な学者による学生向けの記念講演会であった。講演者は全部で10名、そのうち経済学者が3名含まれていた。ルロワ・ボーリュウ、F・ウォーカー、A・ワグナー、いずれも名誉学位を授与されたフランス・アメリカ・ドイツの斯界の権威者である。そして、講演順位はボーリュウが4番目、ウォーカーは6番目で、殿を勤めたのがワグナーであった⁷³⁾。

講演会は午前11時から始まった。数百人入るホールは満席で⁷⁴⁾、ひな壇と前席は評議員、教授、来賓者で占められ、各講師の熱弁に聴衆は均しく感銘を受けた。この時の模様を『フリーマンズ・ジャーナル』*The Freeman's Journal*

70) (63)および(64) Wednesday, July 6, 1892.

71) (63)および(66) Thursday, July 7, 1892. なお、バステープルが名誉幹事をしていたアイルランド統計・社会研究協会でも、エッジワース、L・コッサ、ルロワ・ボーリュウ、L・セイらを名誉会員に推挙した。[(36) 628ページ. fn. 36.]

72) (19) p. 312.

73) (19) p. 245. なお、(65)と(66)の7月9日号は、それぞれ、8日の学生への講演会で、「レオン・セイ氏も語り、大学の聴衆に大きな感銘を与えた。」「レオン・セイ氏はフランスの学界について演説し、大きな拍手を受けた。」と報道しているが、これは明らかにルロワ・ボーリュウとの間違いである。

74) 300年祭当時のカレッジ・ブックに登録されていた学生は、1,151人であったそうである。[(15) p. 251. fn. 74.]

は次のように伝えている⁷⁵⁾。

「学生への講演

昨日、11時にトリニティ・カレッジのイグザミネーション・ホールで、多数参集した学生達に対し、多くの諸大学の中の、300年祭祝賀式に参加された代表団の教授によって講演が行われた。多数の来賓と代表団は各大学の礼服を着用して出席した。そして来聴者の中には多数の御婦人の姿も見うけられた。……

ルロワ・ポーリュエ教授は、フランス協会の黒の礼服に緑のモールで飾ったズボンという素晴らしい服装に着剣して壇上にあらわれ、フランス語で演説した。

ベルリン大学のワグナー教授はドイツ語で話した。氏はモーニングで盛装し、力強い声で演説した。……氏の演題は経済学であった。氏のいう強者の原理である自由競争を基盤としたイギリスの経済学と、国家による弱者の保護を基本原理とするドイツの経済学との差違について、氏は指摘した。]⁷⁶⁾。

75) (63) Saturday, July 9, 1892. (65)の同日号には、「ベルリン大学のワグナー教授はドイツ語で演説し、ジョン・スチュアート・ミルと他の経済学者について語った。」と簡単に報道しただけである。なおこの時の講演記録の全文は(19)に収録されている。

76) 恐らくワグナーではないかと想像される人物のエピソードを記しておこう。

「昨日の金曜の午後、記者の見た光景を読者のなかにも見た人がいたのではなかろうか。イグサミネーション・ホールの行事のひとつが丁度終って学生や教員たち数百人が退場中のことであった。代表団員のひとり、彼の顔付からみてチュートン人であるが、彼が場外に出るとすぐに葉巻入れを取り出して吸い始めた。法学博士——彼の赤いガウンから解ったが——の口にくわえられた葉巻をみて人々は嫌悪の感を受けた。しかしそのチュートン人は、それが悪いという意識もなかったから、何の恥らいもなく、中庭の中央へ堂々へ行こうとしたとき、そこでイングラム博士に出会った。イングラムは、‘あなたは気でも狂ったのではないですか’といわんばかりに彼を凝視した。そのチュートン人は上品におじぎをし、こともあろうにイングラムに葉巻を差し出したのである。イングラムは彼を再びみつめて、相手にわかるように告げた。‘結構です’。その言葉だけで十分であった。無神経なドイツ人でも自分が悪いことをしていたことに気付いたのである。』。(62) Vol. I., No. 22. July 16. 1892. p. 338.]

300年祭記念行事と総選挙が終って、やっとダブリン市民の間に平静さが取り戻されたが、アイルランドや大陸諸国でバスターブルの『財政学』の評価が急速に高まったかどうかを示めすデータはここにはない。

他方、彼の著書が英語圏諸国、とりわけイギリスで財政学の代表的教科書として約30年のあいだ君臨していたことは周知の通りである。しかしその間、決して財政学研究は歩みを留めていた訳ではない。否、むしろ理論と実際の両方面で発展を遂げていたのである。それにもかかわらず、永年バスターブルがイギリスにおいて財政学の最高権威としての地位を維持して来たのには、それなりの理由があった。

LS Eでの財政学の講義要綱をまとめ、1926年に『財政学原理』 *Principles of Public Finance*. として公刊したH・ドールトン⁷⁷⁾は、その5年前に『エコノミカ』 *Economica* で、「イギリスの経済学者には、アメリカ・フランス・イタリアおよびドイツの経済学者と異なり、財政学に関する全般的な論文を書かないという奇妙な癖がある。それ故、バスターブル教授の大著はいまだに独舞台の状態である。それすらアイルランドで書かれたものではないか。北イングランドの大学の或る教授は、均しく主題のすべてに及ぶ本を書くべく熟慮中であるという噂を私は確かな筋から聞いている。しかし現代のような不確定の、そして租税・公共経費・公債に関するあらゆる問題が急速に変わりつつある時期に、かなり現実に即した最新の本をすぐに書くことは、以前にもまして一層困難である。」と述べ⁷⁷⁾、バスターブルの書物に比肩し得るほどの新著の出版の可能性について悲観的な見込みをたてている。そして、このようにイギリスにおいて財政学研究が依然として不振である主要な原因を次の2つにもとめている。ひとつは、イギリスには、どの大学にも財政学講座がないので、その研究を志すべき動機が欠けていること。2つめは、イギリスでは国家の適切な経済諸活動についての消極的な見解が汎く流布しているために、公共支出に関す

77) ③2 p. 199.

る理論的研究がどの国よりも遙かに遅れていることであると⁷⁸⁾。

また J・ヴァイナー (Jacob Viner, 1892—1970) も、バスターブルの著書は該博かつ包括的であるけれども、古好家的な関心だけで細かい事柄がぎっしりと詰めこまれており、アメリカ独自の問題を考える上で、アメリカの学部学生の教科書としては極めて不十分であると批判した。しかしながら、同時に、バスターブルに比肩しうるアメリカ人の H・C・アダムズの類書も、教科書としては過度に抽象的であり、読者に余り多くの知識の修得を求めているという重大な欠点をもっていると指摘した⁷⁹⁾。

1920年代の初めに出た彼らの財政学に関する書評論文は、かくして、いずれもバスターブルやアダムズの時代の終焉の到来を知らせ、新しい財政理論体系形成の模索の始まりを予告するものであった。

「財政は単なる算術ではない。財政は偉大な政策である。健全な財政なくして健全な政府なく、健全な政府なくして健全な財政なし」(ウィルソン)⁸⁰⁾

初版から第3版まで、終始タイトルページに引用されたこの言葉こそバスターブルの財政思想を端的に示すものであろう。だが、バスターブルの好きなこの「健全な財政」という言葉についての彼の解釈と理論は、公共経済の拡大という時代思潮から急速に乖離しつつあった。それと共に彼の大著も旧き時代に置き去られる運命に逆らうことができなかつたのである⁸¹⁾。

78) ③2 p. 201.

79) ⑤4 p. 241.

80) (2) p. iii. なお①1)にはこの引用文はない。この名言家がどのウィルソンであるかは不詳である。バスターブルの『財政学』には、3人のウィルソンの名、すなわち『エコノミスト』の初代編集長 J. Wilson, (1805-'60), 第28代のアメリカ合衆国大統領 T. W. Wilson (1856-1924)——但し、彼の名前だけ索引に載っていないが、書中では、彼の著書 *Congressional Government, A study in American politics*, 1885. がしばしば引用されている——ならびに *Investor's Review* の editor であり、*The national budget*. London, 1882. の著者である A. J. Wilson (1841—?) が出て来るが、そのうち誰がこの名文句を吐いたのかまだ確認できていない。

81) 注27)を参照せよ。

〔引用文献〕

著書（翻訳を含む）

- (1) *A Handbook to Trinity College*. Dublin, 1929.
- (2) Bastable, C. F., *Public Finance*. London & New York, 1st ed., 1892.
- (3) ———, 2nd ed., 1895.
- (4) ———, 3rd ed., 1903.
- (5) Black, R. D. C., *The Statistical and Social Inquiry Society of Ireland, Centenary Volume 1847-1947 with a history of the Society and indexes to the Transactions of the Society*. Dublin, 1947.
- (6) Buchanan, J. M., *Public Principles of Public Debt*. Illinois, 1958.
- (7) Dalton, H., *Principles of Public Finance*. London, 1st ed., 1922. & 3rd ed., 1926.
- (8) Duncan, G. A., *Charles Francis Bastable, 1855-1945*.……From the Proceedings of the British Academy. Vol. XXXI, etc. With a portrait. London, 1946.
- (9) 古屋美貞『米国経済学の史的発展』（昭和7年）内外出版印刷株式会社。
- (10) Groves, H. M., *Tax Philosophers.: Two Hundred Years of Thought in Great Britain and the United States*, 1974.
- (11) 英国 シー・エフ・バスターブル原著，日本 井上辰九郎・高野岩三郎共訳『早稲田叢書 財政学』（明治33年7月）東京専門学校出版部。（初版明治32年8月）
- (12) Jha, Narmadeshwar, *The Age of Marshall: aspect of British Economic Thought, 1890-1915*. Patna, 1963. 2nd ed., London, 1973.
- (13) 神川信彦『グラッドストーン（下）』（昭和42年）潮出版社。
- (14) 楠井隆三訳『ヒュー・ダルトン 財政学』（昭和2年）日本評論社。
- (15) Maxwell, C.E., *History of Trinity College*, Dublin 1591-1892. Dublin, 1946.
- (16) 三上正毅訳『セリグマン租税論』（明治43年）大日本文明協会。510-524ページ。
- (17) Musgrave, R. A., & A. T. Peacock (ed.), *Classics in the Theory of Public Finance*. London & New York, 1958.
- (18) Prest, A. R., *Public Finance, in Theory and Practice*. London, 1960.
- (19) *Records of the Tercentenary Festival of the University of Dublin held 5th to 8th July, 1892*. Dublin, 1894.
- (20) Seligman, E.R.A., *Essays in Taxation*. New York, 1895. 10th ed. rev., 1928.
- (21) 杉原四郎『イギリス経済思想史——J・S・ミルを中心として——』（昭和48年）未来社。
- (22) *The Book of Trinity College, Dublin 1591-1891*. Belfast, 1892.
- (23) *The Dublin University Calendar for the year 1833*. Dublin, 1833.
- (24) *The Dublin University Calendar for the year 1878*. Dublin, 1878.

- (25) *Trinity College Record Volume*. Dublin, 1951.
(26) 山本繁綽『貿易政策の理論』（昭和49年）東洋経済新報社。

論文（書評を含む）

- (27) Andrews, E.B., New books upon public finance. (*The Quarterly Journal of Economics*. Vol. IV, Apr., 1890. pp. 325-331.)
(28) Black, R.D.C., A select bibliography of economic writing by members of Trinity College, Dublin. (*Hermathena*. No. 60, Nov., 1945. pp. 55-68.)
(29) ———, Economic studies at Trinity College, Dublin. -I (*Hermathena*. No. 70, Nov., 1947. pp. 65-80.)
(30) ———, Economic studies at Trinity College, Dublin. -II (*Hermathena*. No. 71, May 1948. pp. 52-63.)
(31) Cannan, E., Public Finance. by C. F. Bastable. (*Economic Review*. Vol. II, No. 4. Oct., 1892. pp. 561-564.)
(32) Dalton, H., Some recent contributions to the study of public finance. (*Economica*. No. 2. May 1921. pp. 199-206.)
(33) Duncan, G.A., The Law school during the last half-century. (*Hermathena*. No. 58, Nov., 1941. pp. 30-39.)
(34) Farnam, H.W., Public Finance. by C. F. Bastable. (*The Yale Review*. No. 1. Nov., 1892. pp. 321-323.)
(35) Hathway, F.R., The Commerce of Nations. by C. F. Bastable. (*Political Science Quarterly*. Vol. VII, No. 3. Sept., 1892. p. 549.)
(36) 戒田郁夫「パークリとバスターブル 研究の周辺——アイルランドを訪ねて——」
（『関西大学経済論集』第23巻第4・5合併号，昭和49年11月，267-288ページ。）
(37) Kemp, M.C., Mill-Bastable infant industry dogma. (*The Journal of Political Economy*. Vol. 68. Feb., 1960. pp. 65-67.)
(38) Mahaffy, J. P., The tercentenary of Trinity College, Dublin. (*The Nineteenth Century*. Vol. XXXII, No. 185. July 1892. pp. 77-96.)
(39) Means, D.M., Bastable's Public Finance. (*The Nation*. Vol. 55, No. 1428. Nov., 10th, 1892. pp. 357-'8.)
(40) Miller, A.C., Public Finance. by C. F. Bastable. (*The Journal of Political Economy*. Vol. I, No. 1. Dec., 1892. pp. 133-142.)
(41) Price, L.L., Public Finance. by Prof. C. F. Bastable. (*The Economic Journal*. Vol. II, No. 8. Dec., 1892. pp. 671-'76.)
(42) Rae, J., Contemporary records : (II) social philosophy. (*The Contemporary Review*. Vol. 51. Jan., 1887. pp. 147-'8.)
(43) Seligman, E.R.A., Bastable's Public Finance. (*Political Science Quarterly*. Vol. IV, No. 4. Dec., 1892. pp. 708-720.)

- (44) Smith, J.G., Some nineteenth-century Irish economists. (*Economica*. new series, No. 5. Feb., 1935. pp. 20-32.)
- (45) ———, Obituary of C. F. Bastable. (*The Economic Journal*. Apr., pp. 127-130.)
- (46) Stead, W.T., The general election and after. (*The Contemporary Review*. Vol. 62. Aug., 1892. pp. 288-304.)
- (47) 高島佐一郎「H. C. Adams の為人、業績と米国財政学研究文献考(其一)」(『国民経済雑誌』第34巻第2号, 大正12年2月, 77-87ページ。)
- (48) ———, 前掲(其二)(『国民経済雑誌』第34巻第3号, 大正12年3月, 100-114ページ。)
- (49) *The Economic Journal*. Vol. 1, No. 13. Mar., 1891.
- (50) ———, Vol. 6, No. 174. Mar., 1896.
- (51) *The Nation*. Vol. 55, No. 1428. Nov., 10th 1892. pp. 357-'58.)
- (52) *The Westminster Review*. Vol. CXXXVII, No. 3. Mar., 1892. pp. 332-'3.)
- (53) ———, Vol. CXXXVIII, No. 3. Sept., 1892 pp. 328-'9.)
- (54) Viner, J., Textbooks in government finance. (*The Journal of Political Economy*. Vol. XXX, No. 2. Apr., 1922. pp. 241-256.)
- (55) Welling, J.C., Tercentenary of Dublin University. (*The Nation*. Vol. 54, No. 1412. July 21, 1892. pp. 43-45.)
- (56) 矢口孝次郎「イギリス経済史学の成立期とその前夜——「イギリス経済史学の歩み」の一部——」(『関西大学経済論集』第22巻第5・6合併号, 昭和48年3月)

新聞

- (57) *Evening Herald*. (Dublin)
- (58) *Evening Telegraph*. (Dublin)
- (59) *Irish Weekly Independent*. (Dublin)
- (60) *The Daily Express*. (Dublin)
- (61) *The Evening Mail*. (Dublin) * issue on every second day.
- (62) *The Dublin Figaro*. * weekly journal
- (63) *The Freeman's Journal*. (Dublin)
- (64) *The Irish Daily Independent*. (Dublin)
- (65) *The Irish Times*. (Dublin)
- (66) *The Times*. (London)
- (67) *Times Pictorial*. (Dublin) * weekly journal

A tentative bibliography of Charles F. Bastable's works published.

- I. Books
- II. Articles in encyclopaedias, etc
- III. Addresses and contributions to periodicals
- IV. Reviews
- V. Criticisms of Bastable's works

Reference : Smyly, J.G. *Index of contributors to Hermathena, 1873-1943.*
Dublin & London, 1944.

Black, R.D.C., A select bibliography of economic writings by members of Trinity College, Dublin. (*Hermathena* 60 : 62-65 Nov 1945)

Wright, Jacqueline, Bibliography of articles on the history of economic thought in Irish periodicals, 1847-1945.

(*History of Economic Thought newsletter*, Spring 1977, No.18. pp. 6-11.)

I Books

An examination of some current objections to the study of political economy ; being an introductory lecture delivered in Trinity College, during Trinity term, 1884. Dublin, 1884.

The theory of international trade ; with some of its applications to economic policy. Dublin, 1887.

London & New York, 1897. 2nd edition.

London & New York [pre. Edinb]. 1900. 3rd edition.

London & New York [pre. Edinb]. 1903. 4th edition.

[La théorie du commerce international, traduit sur la 2^e édition anglaise, revue par l'auteur et précédé d'une introduction par Sauvaire-Jourdan. Paris, 1900.]

The commerce of nations. London, 1892.

Subsequent editions ; 1899 (2nd ed.), 1904 (3rd ed.), 1907 (4th ed.), 1911 (5th ed.), 1912 (6th ed.), 1914 (7th ed.), 1917 (8th ed.), 1923 (9th ed. revised ed., by T. E. Gregory)

Public finance. London & New York [pr. Oxf.] 1892.

London & New York, 1895. 2nd edition.

London & New York, 1903. 3rd edition.

Address to the economic science and statistics section of the British Association. Oxford. 1894. [half-tit. Lond. 1894.]

II Articles in encyclopaedias, etc.

Encyclopaedia Britannica :—

* 9th ed. (1875-'89), 10th ed. (1902-'03), 11th ed. (1910-'11).

** The numbers which follow the title indicate the edition in which the article appears.

*** The name and affiliation of C. F. Bastable is listed in a directory adjacent to the indices of 9th and 10th editions, but the titles of articles which he wrote are unclear.

Bimetallism (11th-14th)	Monetary conferenes (11th)
Decimal coinage (11th-14th)	Money (9th-11th)
English finace (11th)	Seigniorage (11th)
Finance (10th-11th)	Token money (11th)

Palgrave's Dictionary of Political Economy (first ed., 1894-'99, revised ed., 1925-'26.) :—

* The numbers which follow the title indicate the volume and page of the revised edition in which the article appears.

Commerce (I : 338-346)
Distribution of the precious metals (I : 605-606)
Equalisation of international demand (I : 747-748)
Experimental methods in economics (I : 791-792)
Fair rent (II : 12-13)
Fair trade (II : 13)
Farming taxes, principle of (II : 33)
Finances, general principles of (II : 61-65)
Food, taxes on (II : 95-96)
Free trade, theory of (II : 143-146)
Griffith's valuation (II : 263)
Indirect taxation (II : 388)
International trade (II : 449-451)
International value, theory of (II : 451-452)
Local government (II : 624-625)
Pale (Ireland) (III : 54)
Progress, influence of, on value (III : 227)
Protection, and protective system (III : 234-236)
Salt, taxes on (III : 348-349)
Ulster tenant right (III : 597-598)

Wood, W (III : 672)

Herschel's manual of scientific enquiry ; prepared for the use of officers in Her Majesty's navy, and travellers in general. (5th ed., 1886, by Sir Robert Ball) :—

Statistics

Essays in political economy. Dublin, 1888. 2nd ed., by T. E. C. Leslie. (Dubl Univ. press ser.) :—

Prefatory note, with John Kells Ingram.

III Addresses and contributions to periodicals

- * EJ The Economic Journal
- JRSS Journal of Royal Statistical Society
- JSSISI Journal of Statistical and Social Inquiry Society of Ireland
- QJE The Quarterly Journal of Economics
- ST Studies
- TBAAS Transactions of the British Association for the Advancement of Science

** The numbers which follow the abbreviation indicate the volume, page and publishing year in which the article appears.

The Irish export trade in butter, with special reference to the regulations of the Cork market. (JSSISI 8 : 331-339 Aug. 1882)

* Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 27th June, 1882.

On some economic conditions of industrial development, with special reference to the case of Ireland. (JSSIS 8 : 461-473 July 1884)

* Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 27th Nov., 1883.

Some considerations on the proposed alteration in the gold coinage of the United Kingdom. (JSSISI 8 : 551-556 July 1884)

* Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 24th June, 1884.

Considerations on the industrial remuneration conference, 1885. (JSSISI 8 : 623-33. June 1885.)

Monetary reform. (JSSISI 9 : 95-105 July 1886)

* Read at meeting of SSISI on Tuesday, 22nd June 1886.

Economic notes. (Hermathena 6 : 95-104 1886)

Homestead laws. (JSSISI 9 : 209-221 July 1888)

* Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 22nd Nov., 1887.

Emigration and immigration. (JSSISI 9 : 300-315 July 1888)

- * Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 26th June 1888.
- Economic notes. (Hermathena 7 : 109-125 1889)
- On some applications of the theory of international trade. (QJE 4 : 1-17 Oct. 1889)
- The incidence and effects of import and export duties. (TBAAS : 440-448 1890)
- * Report of the 59th meeting of the BAAS held at Newcastle-upon-Tyne in Sept., 1889.
- Taxation through monopoly. (EJ 1 : 307-325 June 1891)
- Banking reserves and currency reform. (JSSISI 9 : 562-571 Sept. 1891)
- * Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 2nd June 1891.
- Progressive taxation. (TBAAS : 918-919 1891)
- * Report of the 16th meeting of BAAS held at Leeds in Sept., 1890. only summary in TBAAS.
- The report of the house committee on the Senate bill providing for the free coinage of silver. (EJ 1 : 796-798 Dec. 1891)
- The taxation of ground rents. (EJ 3 : 255-263 June 1893)
- The difficulties of bimetallism. (JSSISI 9 : 664-671 Aug. 1893)
- * Read at the meeting of SSISI on Tuesday, 24th Jan., 1893.
- The new budget. (EJ 4 : 352-355 June 1894)
- A comparison between the position of economic science in 1860 and 1894. (JRSS 57 : Dec. 1894)
- * Read at section F of BAAS, August 1894.
- Reprinted in "Smyth, R.L. (ed.), Essays in economic method ; with an introduction by T. W. Hutchison. New York, Toronto & London, 1963. pp. 126-143."
- Scope of and reform in economics. (JRSS 57 : 611-626 Dec. 1894)
- Ireland's place in the financial system of the United Kingdom. (EJ 6 : 185-203 June 1896)
- Imperial finance and the Irish financial relations question. (EJ 7 : 420-423 Sept. 1897)
- Adam Smith's lectures on "jurisprudence". (Hermathena 10 : 200-211 May 1898)
- The new budget and the principles of financial policy. (EJ 9 : 204-211 June 1899)
- The distribution of revenue between the central government and local authorities. (EJ 9 : 541-550, Dec. 1899)

- Note on the budget of 1900. (EJ 10 : 208-210 June 1900)
- Some features on the economic movement in Ireland, 1880-1900. (EJ 11 : 31-42 Mar. 1901)
- The budget of 1901. (EJ 11 : 224-226 June 1901)
- On some disputed points in the theory of international trade. (EJ 11 : 226-229 June 1901)
- The budget of 1902. (EJ 12 : 261-263 June 1902)
- An imperial Zollverein with preferential tariffs. (EJ 12 : 507-513. Dec. 1902)
- The Irish land bill. (EJ 13 : 169-176 June 1903)
- The budget of 1903. (EJ 13 : 244-246 June 1903)
- The Irish land purchase act of 1903. (QJE 18 : 1-21 Nov. 1903)
- The rule of taxation for revenue as a canon of public finance. (EJ 13 : 505-510 Dec. 1903)
- The budget of 1904. (EJ 14 : 305-307 June 1904)
- Report of the (Russian) Minister of Finance on the budget of the Empire for 1905. (EJ 15 : 119 Mar. 1905)
- The budget of 1905. (EJ 15 : 246-248 June 1905)
- The present position of Irish land purchase. (EJ 15 : 521-526 Dec. 1905)
- The budget of 1906. (EJ 16 : 277-281 June 1906)
- The budget of 1907 considered with special reference to the income tax. (EJ 17 : 165-170 June 1907)
- Report on the trade in imports and exports at Irish ports during the year 1904. (EJ 17 : 295-296 June 1907)
- The budget of 1908. (EJ 18 : 311-313 June 1908)
- The present position of the Irish land question. (EJ 19 : 68-73 Mar. 1909)
- The budget of 1909. (EJ 19 : 288-293 June 1909)
- British financial organization. (EJ 27 : 69-73 Mar. 1917)
- A new currency for the free state. (ST 12 : 198-201 June 1923)

IV Reviews

- The economic basis of protection. by Prof. Simon N. Patten. Philadelphia, 1890. (EJ 1 : 596-599 Sept. 1891)
- The history of tariff administration in the United States. by John Dean Goss. New York, 1891. (EJ 1 : 780-781 Dec. 1891)
- Il dritto pubblico nei sistemi finanziari. by C. A. Conigliani. Bologna, 1892. (EJ 2 : 526 June 1892)
- Beiträge Währungsfrage in Österreich-Ungarn. von C. Menger. Jena, 1892. (EJ 2 : 526-527 June 1892)

- English trade and finance, chiefly in the 17th century. by W.A.S. Hewins. 1892. (EJ 2 : 527-528 June 1892)
- The commercial policy of the British colonies and the Mckinley tariff. by Earl Grey. G.C.M.G., 1892. (EJ 2 : 681-682 Dec. 1892)
- Taxation and work. by Edward Atkinson. New York, 1892. (EJ 3 : 94-95 Mar. 1893)
- On the shifting and incidence of taxation. by E.R.A. Seligman. Publications of the American Economic Association, vol. vii., nos. 2 & 3. Baltimore, 1892. (EJ 3 : 95-98 Mar. 1893)
- Principii di scienza bancaria. by C.F. Ferratis. Milan, 1892. (EJ 3 : 99 Mar. 1893)
- Die Handelspolitik Englands und seiner Kolonien. by C.J. Fuchs. Leipzig, 1893.
- Protezionismo Americano. by Ugo Rabbens. Milan, 1893. (EJ 3 : 500-502 June 1893)
- The history, organisation, and influence of the independent treasury of the United States. by David Kinley. New York, 1893. (EJ 3 : 502-504 June 1893)
- Special assessments: a study in municipal finance. by Victor Rosewater. (Columbia College Studies, vol. ii., no. 3. New York, 1893.)
- The financial history of Virginia, 1609-1776. by W. Z. Ripley. (Ib., vol. iv., no. 1. New York, 1893.) (EJ 3 : 504-507 June 1893)
- Manuale di scienza delle finanze. by Federico Flora. Leghorn, 1893. (EJ 4 : 300 June 1894)
- The inheritance tax. by Max West. Columbia Colleg Studies. New York, 1893. (EJ 4 : 300-301 June 1894)
- Progressive taxation in theory and practice. by E.R.A. Seligman. Publications of the American Economic Association, vol. ix., nos. 1 & 2. Baltimore, 1894. (EJ 4 : 301-305 June 1894)
- Body and soul, or the method of economy. by F.W. Bain. London, 1894. (EJ 4 : 692-694 Sept. 1894)
- La funzione del tesoro nello stato moderno. by Giulio Alessio. Padua, 1894. (EJ 4 : 694-696 Sept. 1894)
- Bimetallism examined. by T. Lloyd. London, 1894. (EJ 5 : 229-230 June 1895)
- Prices and foreign and colonial monetary and currency exchanges of the world worked by weight. by John Henry Norman. London, 1895.

- The science of money. by John Henry Norman. London, 1895.
- The world's two metal and four other currency intermediaries. by John Henry Norman. London, 1895.
(EJ 6 : 99-100 Mar. 1896)
- Storia delle dottrine finanziarie in Italia. by Giuseppe Ricca-Salerno. 2nd edition, Palarmo, 1896. (EJ 6 : 105-106 Mar. 1896)
- England's wealth Ireland's poverty. by Thomas Lough. London, 1896.
(EJ 6 : 237-238 June 1896)
- The history of local rates in England. by Edwin Cannan. London, 1896.
(EJ 6 : 432-433 Sept. 1896)
- A history of money and prices. by J. Schoenhof. New York & London.
(EJ 6 : 433-435 Sept. 1896)
- Introduction to public finance. by Carl C. Plehn. London & New York, 1896.
(EJ 7 : 239-240 June 1897)
- L'Imposta progressiva. by Ugo Mazzola. Pavia.
- L'Imposta progressiva. by E. Masé-Dari. Turin, 1897.
(EJ 7 : 240-241 June 1897)
- The general property tax in California. by C. C. Plehn. New York, 1897.
(EJ 7 : 409 Sept. 1897)
- Essais Économiques. by Numa Droz. Paris, 1896. (EJ 7 : 409-411 Sept. 1897)
- La riforma delle leggi sui tributi locali. by C. A. Conigliani. Modena, 1898.
(EJ 8 : 525-527 Dec. 1898)
- The shifting and incidence of taxation. by Edwin R. A. Seligman. 2nd edition, New York, 1899. (EJ 8 : 240-242 June 1899)
- Saggi di economia e finanza. by A. De Viti de Marco. in "Giornale degli Economisti" Rome. (EJ 8 : 242-243 June 1899)
- Libero scambio. by Arnaldo Agnelli. Milan, 1897. (EJ 8 : 243 June 1899)
- The science of finance, an investigation of public expenditures and public revenues. by H. C. Adams. New York, 1898. (EJ 8 : 432-438 Sept. 1899)
- Sul bilancio dello stato. by E. Mase-Dari. Turin, 1899. (EJ 8 : 562-563 Dec. 1899)
- The elements of public finance. by W. M. Daniels. New York, 1899.
(EJ 10 : 215-216 June 1900)
- System der Finanzwissenschaft. by Wilhelm Roscher, fifth edition, enlarged, edited by O. Gerlach. Stuttgart, 1901. (EJ 12 : 387 Sept. 1902)
- Il valore della moneta. by Achille Loria. 2nd edition, revised and enlarged, Turin, 1901. (EJ 12 : 388-389 Sept. 1902)

- Financial history of the United States. by Davis Rich Dewey. New York & London, 1903. (EJ 13 : 397-399 Sept. 1903)
- Principi di scienza delle finanze. by F. S. Nitti. Naples, 1903. (EJ 13 : 399-400 Sept. 1903)
- Roman private law in the time of Cicero and the Antonines. by H. J. Roby. 2 vols. Cambridge University Press, 1902. (Hermathena 12 : 512-517 1903)
- Economic inquiries and studies. by R. Giffen. London, 1904. (EJ 14 : 271-275 June 1904)
- International trade. by John A. Hobson. London, 1904. (EJ 14 : 609-612 Dec. 1904)
- Principles de la science des finances. by F. S. Nitti. traduction française de J. Chamard de Principi di scienza delle finanze. with preface by A. Wahl. Paris, 1904. (EJ 15 : 412 Sept. 1905)
- Hundert Jahre Zollpolitik. by Ludwig Láng. authorised German translation by A. Rosen. Vienna and Leipsie, 1906. (EJ 16 : 430-432 Sept. 1906)
- The principles and methods of taxation. by G. Armitage-Smith. London, 1906. (EJ 16 : 575-577 Dec. 1906)
- Manuale della scienza delle finanze. by F. Flora. 3rd edition, Leghorn, 1909. (EJ 19 : 427-428 Sept. 1909)
- The inheritance tax. by Max West. 2nd edition, revised and enlarged, New York & London, 1908. (EJ 19 : 428-429 Sept. 1909)
- The budget in the American Commonwealth. by E. E. Agger. New York & London, 1907. (EJ 19 : 429 Sept. 1909)
- The nature and first principle of taxation. by Robert Jones. London, 1914. (EJ 24 : 406-410 Sept. 1914)
- Disturbed Dublin: the story of the great strike of 1913-14. by Arnold Wright. London, 1914. (EJ 25 : 64-66 Mar. 1915)
- The financial system of the United Kingdom. by Henry Higgs. London, 1914.
- The system of national finance. by Hilton Young. London, 1915.
- Fifty yeas of Exchequer and Audit Departments Act. London, 1916. (EJ 27 : 69-73 Mar. 1917)
- War-time financial problems. by Hartley Withers. London, 1919. (EJ 30 : 92-95 Mar. 1920)
- The economic history of Ireland in the eighteenth century. by George O'Brien. Dublin & London, 1918. (EJ 31 : 109-114 Mar. 1921)
- Outlines of the industrial history of Ireland. by John F. Burke. Dublin &

- Belfast, 1920. (EJ 31 : 114-115 Mar. 1921)
- Modern Irish trade and industry. by E. J. Riordan. with historical introduction by G. O'Brien. London, 1920. (EJ 31 : 245-247 June 1921)
- Ireland and the Ulster legend. by W. A. Mcknight. with "foreword" by Sophie Bryant. London, 1921. (EJ 31 : 247-248 June 1921)
- British war finance. by T. J. Kiernan. London. (1921). (EJ 31 : 248-249 June 1921)
- The economic history of Ireland from the union to the famine. by George O'Brien. London, 1921. (EJ 32 : 243-247 June 1922)

V Criticisms of Bastable's works

- * ER Economic Review
 JPE The Journal of Political Economy
 PSQ Political Science Quarterly
 WR The Westminster Review
 YR The Yale Review
- The theory of international trade.
- 2nd ed., 1897. reviewed by F. Y. Edgeworth. (EJ 7 : 397-403 Sept. 1897)
 reviewed by William Hill. (JPE 5 : 532-533 Sept. 1897)
- 3rd ed., 1900. reviewed by F. Y. Edgeworth. (EJ 10 : 389-399 June 1900)
- The commerce of nations.
- 1st ed., 1892. reviewed by L. L. Price. (EJ 2 : 324-325 June 1892)
 reviewed by Frank R. Hathaway. (PSQ 7 : 549 Sept. 1892)
 reviewed by anonym. (WR 137 : 332-333 Mar. 1892)
- Public finance.
- 1st ed., 1892. reviewed by anonym. (The Times : Friday, 1st July, 1892)
 reviewed by anonym. (The Dublin Evening Mail :
 Wednesday, 13th July 1892)
 reviewed by anonym. (WR 138 : 328-329 Sept. 1892)
 reviewed by Edwin Cannan. (ER 2 : 561-564 Oct. 1892)
 reviewed by H. W. Farnam. (YR 1 : 321-323 Nov. 1892)
 reviewed by D. M. Means. (The Nation 55 : 357-358 10th
 Nov. 1892)
 reviewed by Adolph C. Miller. (JPE 1 : 133-142 Dec. 1892)
 reviewed by L. L. Price. (EJ 2 : 671-676 Dec. 1892)
 reviewed by E. R. A. Seligman. (PSQ 7 : 708-720 Dec. 1892)
- 2nd ed., 1895. reviewed by Henry Higgs. (EJ 6 : 104-105 Mar. 1896)
- 3rd ed., 1903. reviewed by F. Y. Edgeworth. (EJ 13 : 226-228 June 1903)